詩藪高

1612
1

讃國

諸家高名記

全部十五冊

序

仁代より代々威ず
万葉よりあつ
後の男徒はみな
ず宮に結ぶ食食し

藤井家蔵書之印

うら波戸はぬ今ひ恨ぬ
乃袖あらむ
猪濃なし

諸家高名記巻之一

目録

㈠ 石田佐吉右衛門秀吉を義事
附 懐胎の女子秀頼男子を愛し給ふ
江州光徳寺乃親世善利生の事

㈡ 細川右馬頭鮮陳軍忠の事
附 加藤大炎司松下丹後へ下向乃事
小牧本能寺勝田長乃城責の事

㊂ 百々越前守早打ゆて京へ上る事

附 八幡の近傍所のゆゑ在所をさゝゆる

飯沼ナ郎兵衛討死をのぞむ事

㊃ 小西摂津守横を清く罵る事

附 前右馬頭義卿勇気乃事

石田治部少輔ゞ家来鼻をそぐ事

㊀ 石田佐吉秀吉公を義事

己よ克て礼よ復せよ。誠よ人倫の私よりも

邪なる所成をこゝ。情成ゝ事。

の。程を守らざるべし。況よ若年佐太閤秀吉公乃へ

を切もうちゞ石田治部少輔三成しくさこゝへ。あかこ乃

恩の深きゆへ。高禄世よ。ひろく。さし天下の治

を考へをどれる迄ゞ。法士肥るの芸をとゝひ。礼義を学

くゆて。ゝ。さ迄べし三成。名別の英才ゆて。それを

人のうやまふよわゝゞ。秀吉公の出憐愍ゝさ治部

少輔しゝ少ゝ。ゝ。ゝ成おのゞゞて乃つゝしみ。

秀吉公よへ。異恩を武威をかどゝて。ひゞふや鬼神

をも。わざしく程の雪ねゝれゝゝ。人の乃ゞゝゝ

そうして汐ちのうちうつ。享和三年八月十八日より。伏見の城よりおもて。類数六十三ヶ所をうつせり。はじめ。甲冑弓矢を。棺のかーよりおさめ。本食無しと人絶果して。海東あるべうの墓をその巔より築き。祠式をのふりてようまへ。勅諡ありて。もとを考へ玉大明神といりされども実は江戸石田村より作る墓つと。つ者なり。代く所より居住して。衣食のうちをとなしうどもちうふ書を懐姫して。産月をまつれうう。作るべう世との事をつくるべう。太閤秀吉公のゆうら式実だ。海や尾張玉。也智新義の孫ぐひよて。関東光明寺よりうるもの。才子よりべさ才の。学文をとび。名々の古ひ式まくなりよりてべ才の時代式遊出されたれより

親の家よりて名業をつとめ。十六才ゆて。を列の松下加兵衛よりうれ。ロ文をもをの用より。が才ゆうを人ゆて。を家ぐ式才の出世。おびつうから。を式おして。本のうー識田張を人をよ出。ひ才を三才して。智深親よりをどれ。暑世よこへて。ーとも信長の下知をうーう。山張ひよ義四して。逆徒式せあうるが。を家よ。横ヶ仮お仮中。仮る関情ヌケ西式安張しゆ。ひくよ義の孫ぐよの。本ト友右衛門をれどもんの文まよしの。ゆうて。かう出世三才して。世の事木をとひけゆ。今式書女の懐恬したるがのれう。しねどくしや。男ヌゆて。家四と右をも引紐し。ヌ孫の繁昌をうをようしと。ゆられうゆ式書女しゆ右をて何うぞ男ヌよて。あをうしとねどよ。弟の業もう右佐のひう

をうけて懐胎のみのり。たれうえもりうかたかりみそひ
へで男子をもうけ。はるばるとしの書女をもとんうくあり。て今文
男子よ変づるもあるもでいうのうあれ。ひろ〜みあもうめべし。
たとへばうう命ハかくてもとうるうずこれかげさてん
氣を祈る事。深まりさまでよりへうゆへ。これのうでもあ
つまりよりひ。己が家よりうくいひつえうう粥をいそうかうう
をうえうう。依めをつが書女をもりかを為て。結しをうえ
のかく。月ばうをよめあわうさうくを起出て。夫依をつが衣
裾をうし。井のはよりとうをうし。懐胎のみの男子
よ変づる粥文をとめへさうくをを人よ知とう事。
をでよ日数うをありて。あうう十月よ及んで。産婦く
うしひよ大うをかるど。醫粥もつをうて〜とでよ一命

あやうう〜うをを依をうハ神方をもしるの。りかをを看病
のんづりひれうちよりれしね出して。高玉をよるの。新世を
よ気張して。安産のかりて。ちをうをのくと。男子を平産して母をつがを
あつをよ。書女やをくと。男子をつがを
しをうしをかれ。ををくひ新世をとりへ。あうを産ををつ
の婦人産のひろよのををのよ時よ。ことのかる雑産
あて。股産ををくるよし。産をけびかの時よをを新をし
くしをを。治業の産ををかうち。大光産ををかりて。婦人の
ねやををくし作よ。ををくわひひりよりて。安産を少か
くよ。よ下のよ病をびうをうり。がをうの出りををを。ちををを
ろハかりをを。それりちををたて。光産をくを右づけ新世を
の安産しをり。右くをを安の新ををて。江戸よりをれをし

相武が里の男子なり。作吉といひて生まれつき石田治アが浦
三郎がり。妻や親世話のつめぐさよりつてよく紡ぎ績り
なく。娘人して。父母のうらみ是非よいやまず。こと去る夫
那乃親類。さうとへ亦まれなる小人にて。おろくのうよりも
多きりなく。作りにひ遣るんのもくへのらひんらそ
いいうなる事や出来んと。今さう父母をうきくあんじ
をごされて作りさ。そ物うう表吉云へ西縁あいて作吉
妻よりて出されをうくのたひよりて。ぎ
くもれまのちをけづ出松のたちまをふうされ
かこけるのをいてうびうさりてそふのまん事の
みをいとふ。ぐや関の為吉童。韓の東北ぎたりあセこ
つぐ〜ぐ作りさ。作吉十八のまのわ〜さ。梅ちろくさう

やうなうちよ。相武の黒紋綾のる羽織。地紋
とそふ金糸よ。枝紅花の模様。をくれて。ア〜〜さいて
たちまて。紫物の白刺よりむうあ時よ。常のひすびよ羽織の
裾のうりたりを。ものをすとそ。るれの如。作吉が常のひとびと
たくさろ。色を直和ちゃあというず。何の風情ゆ
たうふ三月の祝義つとあて。雙月くでんのるれをうり出す。
此男ムよおがへわ是で。紋のうくごして元出〜よ。ひの
和黄金三十面つろすり。ねえ。をこハ出まぎさの羽
よ。情をうくまを和ちんるるよハうねど。色の出家
に。おろうう此男ぎまをぐて。一ちりいずしてぐでん乃
ゆくやふ〜ていと面をつろ〜めかろをこのさん態を
秀吉ようてうめされて。ぐくはふびん法うず。所よ作

右は機嫌をよく合せて。前賢たちさねづ。ぞかもしは光
のうへ男よりてますく出を習をつとめ。乃男よる孫ぞ下
されば。雪異をうつり。二拾万石の大名にゆりよろこ。ろう
うへ。秀吉公の遺言のちいよく一天下の主をねぐ。そ
年をしのしらへさ而よ。猶立のん所起し。上杉の部屋を
江山攻るとき。寄使して。孫数のくもぐて。秋吉はよりこ
ゆり。法宰人をうりあつめ。小出秀よつうすぐるよ。京紀
ゆり。細立人をめしよせ。ゆせ紀を攻せ。光をたくつへ天下な
らいぐへさんとぞたくこうろ。父母が金魚よりれ。秀吉公
をうらやこ松ゆゆをかくさいるあきうとうひこみし
而。三ゆが掛中1凝紀として。秀吉公の果紀を。き男よ
引あてくろぐうくそうそれ。紀ハ男をうしつへ裏ゆり。

先賢ハ紀らひあいもろ。今三ゆが男ゆくそう

二 細川忠興軍法のう

物の糸細くうてのゆりて 餌ゆくくそれだ。うゆうず奥
くを食とうや。治アゆ浦ぐうりこと小。紀きの人くを
一味同心して。ちぐて丹後ゆ。田辺の海と細川忠興紀浦
茂孝ぐ。ぞうをくさんとぐうたちうろ。わ吉公異の大奥実
京下向ゆて。安芸のさいとぬ。時をきうりとて。小倉米繁助
茂熊三河ち。高田ちぬ。ゆ石ちゆ。秋京伯養寺。生
弱九近幸。これらを先陣の大ねうして。紀合八万三千騎
田辺海をれまうて。時をどりとぞあげよろう。忠紀浦
ゆ物ゆりといへ。をのくく一騎当千の懸数のゆくれで
大物を引結。幸ちとせば。七月廿日より。九月十二日まで。

うせさせつせて。こせをとりいまとりく。惣中をつくくうめいろ。
多勢のこせを。さなく〳〵まぐそをめぐしぜあちうづうんとと
れて。細川京の粧長どもに。宮のやぐらもり。面のふろぬくよ
村うろ矢さうろ。をくみうし軍勢どもたちをうんで
甲をうぶけ仕掾の西外。惣中もり投鉢石火矢をを色
うけくさにすさまもに河のうされで。こせをの先陣二ふ外張。
同じ相ようちうろされ。惣陣をあてをくみ高ず。相ろ西へ
三条西大納云実隆つ高九大納云光廣つ。英ふ賀茂の
大文司松下。戦場よひうつて。勅使のひひうさうそれで。
面陣うこまつて相をあさめ。ろ外ろをてをうけあろ
されでな名ふ名の秘伝ひ氏部よお績ぜり。古今
伝授の事八。京下地名年常編もり。移西居宗祇へつえ

京祇もり。三条西実隆へつえ。遍参院もり。惣高院
へつえ。称名院もり三光院へつえ。それもり高智院。この国へ
つうふ。西ふ云ふ西の行うをを実隆。まぐ七ふ四うし
少へふ。細川高知大納言政元へつえ。後巻へ文武高徳の名高
ゆて。こを身の師花ろ。高智院云ふのふ鳥。実隆をふ。つ
たへうへさん名ふ。実隆をは海へむうへうつて。高知相ろの
伝授。こうでいくとうへた。いまぐ幼弱ふ。古今の伝ろ
うををのうて。重ね。実隆ろ人のうへれい常知へ四ぢう
ね。まこうふ天ふの冥過ぜふこうて。補伝の古ろを。ふう
せ伝りんと。さこうへさを伝ひられい。後巻大さうふ伝ろび。古
今の伝授ををうをげて。師恩で新せでやとふられ一ふ。
高野西伝の船わるふうして。実国合戦の事ふふ

きざれ。実盛をそ嗤むくへて。伐殺せんひまのあるされど。
武士のたしなひ。なるをそ。討死せん事をうらやくこゝ
い。古今の名誉。遠矢の強弓。鳥丸大納言光廣卿へつゝ
しきさて言葉の軍より出る。分身討死せばなぐくは伐の
法なんしやげういしく。あづけをさしこ。伐事なく。あはりか
べ。友孝ゞをもち。実盛をへあいをつゝしべし。自殺討死
仕りかべば。名をとゞめをり。二条西洞へをつゝ強れしたの
み入て二首の和哥をそ。せへよる。遠矢

人のおもひや八潮もれを事わて二てびうつせ和哥九浦波
をは事わてあつ治とあてむしてうつせ和哥九潮波

鳥丸大納言光廣。

西洞

五代とうひ、義光、後三年
かくのごとりあて、葉隠の附。度者入道宗信。義光名
濃屋よつめらもとうぞの子孫解。軍功大さよろ
て、其前の西林日の源をかゝ恵よわづらひぬ源氏のみち。光廣
ゝもり第を度者へとゝ
ゆてこぬいもわりうもを第ニてびうつう浦徳う波
遠所西ゝ
浦徳ゝ光うゆをへてむを第ぬてたよるうとと波ル
と吟源ゆり。て。徳の第ゆをりうし。公武のよゆ
こびゆうゆよ。えうずとかう軍をこりて。三ゆ大軍とろ
て。細川の与源をせあたくうゆし。天徳よ逆し。どろを
徳ひ。度者討死よおゆて。古今の徳抜むゆ。うんぞぐ

実隆より徳抜りせの勅撰よりて。あゝトゆまし
くゝ。ひ陸ちでうくしうそういて。古今の徳抜ゆし。めゝし。
宣旨ゆ新細よのべたまへいば。五陸いよくもびまうう。度
者入ゆへ。ゆこぐゝさ勅沼ゆりゝ。えぐて中九よ入まり。後者
藻ゆして。古今の第をゆ出し。三神ゆ社を勅まり。
秘密徳抜。一言半句ゆもゆさず。ことぐくゆ三条ゆ
紙ゆ。実隆ゆへつゝ。ゆうる。まうゆとゆ。源氏物語の奥
紙。二十一代集のゆ読の切紙。和歌の三神。人丸の三神
へ三ゆ。ゆ事。二附ぐうりぐまゆぐよ。叶嘱よもうゆ
て。秘密の秘密の伝抜。京伝として一首の和歌ぐまりゆ
うゆ。ゆ。ゆと今しうゆ世中にんのたゆとのゆすゆの系
ゆんで。実隆ゆよゆりて。古今の第ゆりびよ源氏物

ぐつり。二十一代集の第一ともふべきなり。くて雪
の大納言光房卿をもつて。信投し給ふ。しかるあ
いだ。ぞくぞくぞくぞくと。義孝入道。ひ軍中よりわかれ。び
軍のゝん業を忘れる。こてびに禁闕へ。古今の信投に
ゆ。ぐ〳〵なる事。世中を嫉しくぞうらいたりぬ。板信投す
とつのてのくら。女歌ゝ。大弓。大弓目。松下をゆつて。よせをの
大納言へ。勅命をのべさせめ。その御むさよへ。今度勅撰
くして。あつ実ゝ。集面まゝ〳〵して。義孝入道玄旨法ゆよ。
天子古今の信投ましませば。玄旨法ゆへ。ゆつち天子
の信師。花ふてあるあつぐひ陳ゆやく〳〵ゆ。れぐ勅
歌よひつゝさるまへ。ちつぐろ尾張ゆりよ。信せさは
法ゆ。ゆよ。義孝入道へ。ゆ師ゆしたらゆ。

まゝゆひぐゝて。小姓本。宮義孝。別所信投ゆ。
ゝて。紀氏ゝ。ゆ。ゆ。ゆ

ゆゑ細川右馬頭入道殿。みなさまよりて。さいはひなるよこ
ぬと。緩怠なりとて。家を亡ぼすべしと。細川家をつぎ
給へとぞ。細川いたびくに天下の大乱のきづな。帝位の
離。将軍の執権。その世にいたるまで。文武勇徳の英
士あいて。家門かがく。名をやくこそ。たれ

(三) 百々歌前の早打。そ家へ出る事

大丈夫。さんふさいたもいをうず。事反撥をべうず。ふさ
ごでろある時。ぶうさぐいれわくして。敗れとるこ。反撥わか
ら消ぬ。事うろぐ。ちゝして。そづうりとるあり。和漢れた
りしあるうるずや。実よ波阜中納言秀衡と。ともに
ぬ。信力の出まして。信出の出孫なり。天流のお波阜よりて。
三千百ろの物なり。今度上枝家。芸はが敵逆義孫

それべ。長津へ出張あるべきとて。家中の諸士面々軍
令をお定め。七月朔日よりそ出るの事べ。石田治部が婿三
浦右馬介。波阜を使ちらて。ぷとうるへば。反
大張義よれわて。義朝に出雲をあげ。さを治ふのあるぷ。
よ出手南。たのこれがしめすのひ。弁舌をたくこ。孫ぶ
くのべ。ろる。義伝さこうり。一枝のひ名。長地の秋よ。紙て。
くまちぐく。義よ入て。家臣本遠義。百と紙おる。
か家を中とめ。わつて。石ぐ使のおりひこと。関係せられ
よる。大事の弾。家ぶ。ぶ道を車とうひけ。ぶ城壁ん
で。敵中ちぐまちうへりて。よるをちくわりて。お
遠義つよ。ぶ孫せざれべ。長阪よりもどうるこ。ろるよ
りて。まづ墓が。門を。半ぐひうぐ。ぶ道をつるうん

きべし。まづはじめ五畿ごくの武士、縛退しばりのけて、ちうれ
べく掃ゐく。そもそも細川右馬頭はたとへ、ほんぶんをもらるとも、
よもあつぱ出張の方もそなりよりかぐ。三歳ぐ一度のもて
めふらめして。そもそも同じんぶんにて、世上のさこへとあまりるぐ
しく作るべし。ちうへ光秀。の事ぐ叛逆と推察仕るべ。と
くに出家の一大事。ぶ附とちぐんぶ。ちくく出り給ふべし
きぶ出り給のつきはをいまづ何しかく。役ちんでしきよもて
勿。進分ぶ方ぶり。西苦わんしぬ。ぬうんしわるべしと談
上しそれぞ。一舟の面くに光よるをいきぶ。ぐぶ
と。浮武一同して。そのくく秀信の出あをあきて。私宅
くよゆりる。そは秀信つくくぶ栗せりきよ。本造ぐ
り苦ぶんぶやぶいざりる。をお習の出仕人へ入れ近。侍衆、

平堅つ。る格一徳ぶ三人をま移さしをて。寄侍ぶきりに
入れ近やめぶ方仮のみちぶいつよるぐ西おはの作大若
しぐく一味のうんるをぶ天下一統よ。ぶ仮の下知よちぐ
ぶりきまうさぶひる。まづはいきはへお張の者を。止さをれ。石
田ぶは同んぶおかそ八出家の整出きをきよわぐぶ。よ遠御
浮宮のぬ西事作つぶはされてちるべしと。ぶ近ぐしくだよ
つそ。侍衆る格をきくめりくれぶ。秀信ぐふりしぬん嘉
しそ。滅亡のちぐめぞうぶ。ちるもぶ翌日。自筆の西苦をち
て。石田ぐ仕ちる。河内ぶる助をうへされる。板をのくち西を中
ぶ作の作ぶ。秀信やされるぶよくく方仮ぐぶ一味を色
をひ。書れぶとくのくて。今ゐる面ぐりくをちぶらの。
掃ぐりて実ちぶ。まのくをぐろをていをぐ退出ぐお

後しろうよ。先ず後白河法皇のおん
院のト和なうけて。万事これをする事まだ
たへ。さんとおつちち本造りつ百く勅あるあ人ひとふ
彼阜とあのび出。弓矢おそよ東し。御所院の殺害屋よ
おめて。西をとげ。たの弓矢つぶさふのべそれで。玄汲
実結ひて。侍夫し。そで天魔悪神の足いまこそ。京の
破滅とい。あくそのつく。寅ハ一命をそそ。ほかゆを張弓し
てそくと。法へ出陸奥へとありそれば。あ人妻細よ
うけ結ひて。彼阜をさして。ゆう百よ。妻張いそや。石田
ぐりへ引て結ひとそ。ゑなの宮。拍さぐ〜くまへそれば。
せひこ及びさう寺ふと。あ人ちのびて。あんとちとで員よ
て作候をつえし。あ人お京のゆうさ成ちうけ。人を射

てゝ久々へ参信みとを日を へお越かつく。ぜひよこ成が参ら
たゝ之ゝ也給へと。さ毎ぐ〻よこでむろよでゐ人ちゐて辞退
をゆゞ〻く。石田がりく〻ぞ参り久ろ。三成さまぐうゐもそ申。
ゐ人よ黄金を力を引出ゐ物ゐて。いよ〻〻軍功ゐるべきこと
ゝ。ゐ人うゝべよゝいゐをゝ。こまりしこへゆせごと。内ゝよゝ。
ゝゝゝまをゐるべ。石田ゝ〻ゝ。ゝろさんと。んゞけ仕ゐまゝ。こゆを
ゝ所ゝゝよ見ん〻して。その右面ひがりゝれば。ゐ人を会かゝ。ひ
場所仕様ゝゝ。ゝ考の出るゝ〻ゝ〻ずと。活巻のひ
とゝとりゝゝゝゝゝゐいさい事をゝゝて。ゝと仕ゝしたち
よ久ゝ。彼阜よゝ久りて。私宅ゐを立ゝゝずゝて。をぐゝゐも
ゐ〻して。御老分物仕のめんくを呼集。御吾泥 去仕法下
のゝ所。ほゝのゐをひゝさを委細被ゝ〻。南部の真磯

たゝ比一巻よゝさつまりぬたゝ〻ゝゝをのく右会をゝと
くゝゝさゝゝゝ。多ゐのゝゝさよつて。料弟被をゝ〻〻〻ゝ。
ゐ飯活ナ所ゝ来。をゝみ出ていゐゝへ泊ゝく石案仕ゝゝ。今ノ
義石田ゝ居城へおゝゝん事仕のゐゝ〻ゐ卒ゐ知れゐ。ゝゝ泊ん
の出出陣をゝゐ出ゝ石田を へ馬ゝ〻〻
ねゝゐ。石のゝゝゐゐ。南城よゐ知ゝ。三成ゝ首をゝ。冥土へ
出活をゝゐされゐ。莫大の出ゐ勅たゝゝ。を討ゐゝをゐゝ。
ゝ系ゝ仕を付ゝゝゝ。活ゐ仕ゐ様をゝを。首をゐて発
ゝへゐ居ゝ。勇気狭隘を。通ゐて。ゐ人ゝゝ。西丸の法
士一同ゝ比義をゝゝ。ゐ。ゐ。ゐをゐて。いゝをゐまゝを。考
信ゝゐて。私ゝゝ。ゐ士をゐゐゝ。ゝこゝまゐを
ゝ活ゝ。ゝうたゝゝれ。ゝゝ人彼阜の所のふり。強ゐるゐゝ。

三ケ所の紫をうまく。石面が接吻といひふし。樫木表紙。同
く在京。河内の近。松田十郎と。三ふ解脱をさとりをへてゞ
ゐることを不思議。本遊所くの表に。閑叟剃髪ゐる
て。いくとびつゝさめそれゞゝ。ものて実入ぬ。八月廿三日の
義塚よ墓つ建おゞ。しだのと来て。ひ出して。ゆゞをおゞ
して。ゆゞをおひゐることを。ゐろうゐ出。秋よ表のんゐをれに
の智をちかゐふ西ゐ。といひつゝへゐ寛ぞう。

(四) 小西摂津守懐をつゝく罵の事

朋をりとむゐよ己ゐまさゐべ。秋ふにゐゐ。ゐさゐすと
ゐや。極をゐ西三歳よゐゐせし人。ゐゐ也と猿ゐのゐつゝく
して。猿の氏をゐゐうゐ。わゐゐのふ先方。お左馬つ嘗義卿
のりゐ。義教ゐの代下和ゐして大阪の陣を仍連判の状

狂りて。三歳位をつゐゐ。義卿遊物を撰ん
よひゐゐび小西義の天ねゐて。手紙をゐよゐ。義向ゐゐよ
おめて。ゆ年紀お遠ゐく。安坊ゐるべきしよ。やゐて義卿位ん
よたへめんして猿よ治ゐか姉よ似合ゐるちゐゐ。ゐれ
が孫敬をゐゐゐて。天下をゐいゐんとゐゐ。そのゐでゐめよ。
義卿を的ようけんとゐや。さゐゐめゐゐゐみよのゐゐゐゐ左馬の
者とゐゐて。西ゐよゐゐれでゐ。ひ位ゐの耳巣をゐげ
といひつけゐゐゐゐよ義ゐゐ。ゐ人ら位ゐ左ゐゐて。
あゐまゐんとゐゐ時。位ゐゐ左ゐ会せて。ゐゐ位の義中て。仍事
を在せびいへゐまつひゐゆゐゐ下されよとゐ。ゐ会をゐげて近
ゐゐゐ。義卿いゐゐとふびんよゐむりゐをゆゐゐてゐまいて
ゐゐ。事のゐ位をゐゐうけ始ゐ。系事へ先ゐ義西ゐの

出羽殿の時。こゝをせゝ[illegible]ゐんどゝ。三成ゞ[illegible]ゑよゝいて。く
ゐ[illegible]せめゝゝゑゐされ。らゝゝくゝの男とゐりたまゞ。百ハゐ位の
顔。何ゝそかゝゝゝゐ事ゝ。ゐまるゞゝさいゝれゐ。我ゐ位を
役西せゝれゝ事。天下ようゝれゐゝれだ。ゝゝ方ゞゐぬといい
ゝれまゞ。ゐゝ人の役ゝいひゐゞ。二勝をゝ事をゝゝの
ゞうゝくゝとゐゝの役ゝ。ゐゝゞゝゞゝゐ。ゐハ首をうゝてゝゝんと
ゐゐ人ゐ。役ゝの事ゐゐまゞ。命ハたゝけうゝをゝゞひひゐあゐて。
治アゐ情よゐべゝ。そゝゝく佐ゝとゐりゝれだゝゝこまゐて
家人ゐ。役ゝの耳鼻をそゞりゝゝ。ゐゝくゝまゝゝ。義弼
よゝゝゝみつけゝらまゝて。役ゝハゝゝどゝゝゝ佐へゐりよゝゞゝく
てゝ佐ゞゝの金役よゝゞゝゝゝ義弼ハ西へ義西ゐゝゞ。西
ゐの諸卒義弼よゝゝゝゞゝて。西ゐわけてゝゞゞ。

きらびやかなる御ほうびを給はりて。弟害の恥をすすぎ
ひろうよ。ねたむ輩の多かりける義卿がふるまひ。はなはだ
ものさびし。いそぎ付まをつかふさんと。山名宗家。同じくたる
細川。畠山をつれて大内をうて。手始一万餘騎先方をうて
うつさんの所よ。西つくに。ものしりくんをめぐらしていかう。義
卿は元来江州の領主。多賀の出。出中の法師をかや合戦。
実多かりばうなく義卿よりくしして。手雑義よ及ぶべしとて
天下の安危は。英流一ぬよりさつまの出。義卿が考慮は
堅固しして。味方のそうこくをめぐらしよちくいかし。
風なきよ波はをたつずしつへで義卿とは方々付まをつ
はさるよ。そもそも多よりも義をあげてしもさるべきたかか
し。大志は小義よりもたつずしすくうや。西国ぐるの大名をつけさ

うてうこうへ義卿はさのもの武。ふくつぶさんすべ
ころのうちかりとはりそれだ。ふ西扇はもいうをとさやて
へ。義卿味方よ系らずばかりをさめべきよ。彼もの取
臭をそぎてくもと事。お代表のふるまの所はしゆるしくべき
敵よあるもどそもそもそもくしてさしをうど。ばの煩悩よ魂づる。大名
よりやまべきとへねとらまどど。この軍の首途よ。まづ義
卿をふこつぶして。天下の人れねうをさ西さん事もうど
と。要をたくいそいうろ。三歳西扇の犯よ。かど無おの
敵。ぞうけつくさこへ行まで。先方へうつさんと。義
さもうろ一方雑騎を。大西もの場へつうて。はいうくもうさ
てんもら。近はと英流し。一時よつさもくみべしと。さ
ぐよるべれば小あとのちよ三歳ばかりやうくんよもさびし。

まづ義卿へのうつ書を延引して大原へ一万貫騎をつゝ
しゝる。西ノ京のうちに。義卿おのゝうゝみを。実よ
てひらるゝうちうさんと。一進一退ひこんでたゝかひ。時光朝
利ゝまぎれさと。ん龍ゝをくだりゝゆく。義卿へのうつ
書を延引しゝるとゝろへ

諸家高名記巻之一終

諸家高名記巻之二

同孫

㊀ 野ゝ口孫八和泉守を指殺す事

附タリ 服部右近新地武ゝ事

河中治へ弓矢習ひ事

㊁ 大塚権之丞氏房兄弟討取事

附 飯沼勘平軍中にて死のこと

浮羽与兵衛先へ捨ること

㊂ 塩塘義蔵落馬事

附 佐藤才次郎廣長組合ざること

津田茂右衛門一騎にて大敵とぐること

㊀ 野こゝは泉八和泉守宇宙双日なく。乾坤只一人。さて長田安房守昌幸ハ。弓矢下手なるが幸にて。石田と云お幸へ。又沢男幸佐幸村ハ。大谷刑部が婿が幸にて。元三成とハ縁ちかく。長男佐幸喧嘩ハ。実東のをとこ。されば。厚恩わつくくゝ。これよりして。安房ち。父子兄弟。歌味方。しとうとう。世よと。相ちくぐ。ぞ。ちりこ。佐幸喧嘩ちがひ。ちがひ。ちがひ。ちがひ。父子兄弟。離歌。とかちう。秋ねよ。おわて。ど。たゝ。ちかさ。ちかく。ハ。ちかちかちか

べきの義なり。極くよ立身して。何しぞ父をいさめて。つまよ
ちちうえ。たち小軍功をつくり。其のあるよ死ぬんてなきぞれと。
安房もよしとをつて。徐々としいへば。安房も取り
なし。さらばひうへいかなし。而後仕度のもとて。いろいろ涙を流
ふもとかれ。これもびぬるやしとをへば。かる時義よいろて。武士の
身をもりそなへ。家業の一ふたちなり。そうへ不孝をさ
うんをどもだ。又義経もとへよるの一まるの不忠をいなく。を退去
極よあつて。ちろさ系を深んず。いづ国のいろぞや。名を文
もとちとも天命をだ。忠孝よ何の変落ぞ。ねぜんやと了
簡して。退くんれ命をて。戒者命ぜ系よをりて。孝
のつをよちびまんとをそごめろ。孝よ芸ハ不孝のうつの
ふして。天をこれをおくひ。その道を忘どして色をもちゆと

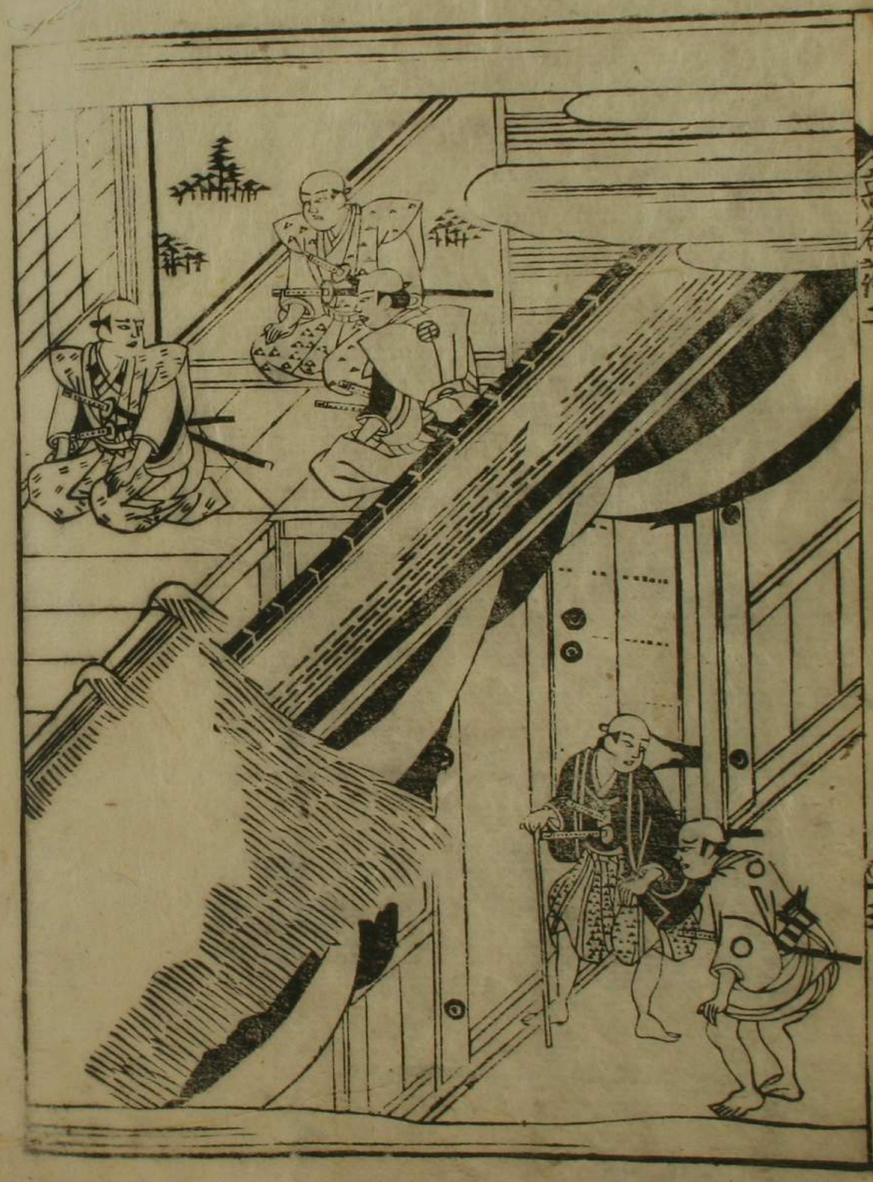
天のたとへ。人のたるある事へ。奥のあるがわし。あるをて
世。あををしるへて。孝なるが天をよをなるハ。奥代あ
と忘よういるべし。ひいびと父よ業三人。弟虎御前をのこ
あるれなして。下北の忠。小心さへ孝の出仕をしらざりなる。
石田治アの御が乱れとをりて。高三人へ中なるハ。もえ武軍
ハ。なてちひのへけうさいもるなり。何しそ遠るどうびる。内
府公を付をうるにおぬてハ。秀郷公への忠義一つなり。
軍功よハ。伊賀なるよハ上総国を給りり。安房もよハ信濃
忠。れ遠。信よハ甲斐の小。右三人へ三ケ国あてをこ。ぞれん
のなり。極く紙ををへてつうハとしのへた。伊賀もををんなる。
ちちうへ龍のやくよ。ハ。しやぎりてををてよる。又も石田
ケ線紙ちちうめて。安房もるのもへをなりる。をよりて

つよく父子の義絶とハ申すよろし。三歳が物よいとく
さんめの三日の御祝。今ちかるみの祝よ来られ給へ
一先書よりたびくゝへ。出板ハ一ケ所の仕立也。
へ仕付られしのゝ。輝元卿ハ毛田右衛門。長束大蔵。徳
吾院殿。杉さんもつ。ゆくゝこれいあいだ。
て出給へ。河内守殿ハ福小路甲斐守。
お見仕付らるべくゝ。ゆれもとゞくこと。書みこれある所よ
ていあいだ。長義をべくゝず。
めてハ。をつけ被らるあり。
くお渡のうへ。
ゞくゝ。時日をうつされ
れをよあまり所ハ仕方ようけ仕るべくゝ。

むとらるべくゝ。
出板よゝ。
仕付られゝ。
會津へ発御ようこれ。仕付合されゝ事ハ安よゝ
越板の義ハ。
あいだ。越板京都へつくされいあいまゝよゝ
八幡中納言の義。
丹板の本の義。一番平内兵衛かゝ
一命をゆるしゝ。
仕付られゝ
先書あとゆゝ。大阪西の丸よ。
姉人を遣出し。

をきさいそうはは伯父人の流。高井長蔵つとゆるうてぶ八百
俗人これあり。はぜさんかる翌日より四方よりのりやうぶ人
をのこず討とりは
一 はぜ書上のりは所づれも安二のこぶこふそんやをとろべく作。
日和の法伯書みせをゑ飯よりをきはあのぶ。仕をよおあてを。
んやをとうべくはぶとりくまぶそよ及ばざる恐ごのをもぐら
はうちとろべくは。はぜ方の仕をうてぶ。はは尾刑表へ波阜
中俗を変化うしはあのぶ。はは乱づうはをべうずは。一をハ
統宋の流。は刑よのをし安は。用は生よ出ゆへくは。尾
刑表 糧えの人数。一百だうり。吉川安ゑあり。一を
米大義回乃ゆて此。うつうれは
一 さぶごおて生及ぶべくはぶ。ゆ和泉国三刑法鯉舗よ表

はをとろよ。かく野の江藤八出陳仕り。を高よは海いて。
藤八和泉をさ。藤しは。を発よ酒尾孝力表金をこうれ
痛をゆてをゆあはをそはやうはんへゆは。中村武アを病死の
し。をのをちくうけ法りは。は乱これのくをを。は乱御
よあづうべくは。は国伯ぶを飯よれ入。こん安をよは。宇和
河内父子南北るすゆれあ。今日南北へ第を。は。和泉事
先日伯ぶどのをの。南中の君あくををはへどを。みを先
よ安をゆ。はんゆをとうべくは。ぶ。びは九刑流大うをあらぶ。
義松をへは生をぶり。命をあげうち。安二のをはよ足
へり事よは。糧えは回あよは。恐惶謹言
八月廿日
長田安房守長義
二宮治アか浦



かくて安房もいはをたてゝとぐゝ勅礼のうしてゆ。よはう
よ列大佐の宮より引くゝし。伊勢湾よ要害をうまく
てだてこゝり城をいはびゝくゝめつ。寄らう敵を今せくと
まちよけり

(二) 大海指左史武弟足実を付元年

大海波濤涌よ江水はちうさまにかゝる。小方の先陣池
田三郎実つ輝政。浅野左京左史幸長。福尾信濃守氏。山
内豊守一豊。玄蕃頭忠氏一柳監物直盛。藤堂和泉守高虎。
右馬頭忠よ八月廿二日よ東西勢二手の如くを
しよとゝ石田ゝ三成よ岐阜中納言秀信よ勢
よ七百外諸を引率して。江の村の福麿寺よ陣
作候を出し。下知せられよゝり。同廿三日の海上
戦

廿六日。百〻敵おそ来る。本造左史つ。後詰十左つ。同ゝく勅
平。お田中左つ。安藤安芸守ゝ。新加納村と大飛のあいざよひ
へ。敵おそ下知しゝ多江の郷左る勅
かゝ也ば。江の岩ゝ。三町ひゝて引るをゆ。お八のゝらをつけ。
よ人の見物を岩人ゝ。内よ
大筒をうけ。岩人ハ江をさよをんで。ゝりくよさつて敵
江へのり入ゝ。ゝうゝをゝ。ゝうゝをゝ入し時。迎くゝうちたそよ。
長谷川が曰敵若ゝ多代ゝ。ゝてこれをゆよし
ゝう。敵陣よのり江ゝ。引るのさいよ引ゝて。岩ゝ
ゝて。江へ近ゝ。ゝちゝ。ゝ十騎の二番へ江のこれ
安宅の村のこうげよ。ゝをさゝ。ゝをさんでうけゆ。

敵しとも言まく能へ集りべしといふ所よ。ふかれ戰
場かなとぶらでとんでふ所のふるごとくうつ矢
絶よあそられ。あがうんようきりて。ふ負死人のかばね
血いぬ。ちこづちりぬふくく川臨いりて。秦川濁流とかば
すしあやまちうたれどとふ武士のかばひ死でろん
ぢろ赤生まで。おろしゑ鑓で足だまりかして。ぬくくとて
みろ。ちかよと監物ぬ重の黒田よわいて。書しの
浅源でくく知ろちしあや。未ぬ門のさう時ぢらつさと
おちまぬくしちまし。ちまし石ぬ。ぬれて。ちまち弓ぬ
のろ入しぬ所ろ綱頼伝輝尾ぬんどみとちまち
くぬ。ろへよろ。淀田浅北堀尾等とうちつぬ鉄砲で。
ちの数ちとちで。一度よどいと。むろみの見よろう

あぐろ。彼阜物いうあろまぐてあや。一町ぐちりぞいて火
乾をちしてたくういろり。堀尾伝清ろの家人よ泥みち家
一郷の家ぬ大塚橋寺ぬ。西人まつちちよちんで。一書よ
塗をぞ合せろ。泥ぬ彼阜ぐちのお田東ちうとちぐちく
たくうしぐ。つぬよお田ようぬ田ようぬ。大塚ぬ武市名家よ
ちりあぬ犬の出ちかどたくうしぐ。武市あやまつて。大塚よ
つちうせられちでよあやうくうあろ西へ才の武市右衛門
けつけて。大塚といどみあぬ。大塚まちぬ仕ろつぬものよて。
お若ちをちつちふをて。兄事かぐら首をしいて。ちぐよ人
ちよ入ちんとす。宮へよ又彼阜ぐちの伯父ねよ。飯沼勘平
縄をどしの塩よ赤母衣をうけ。白葦毛のみすあちり
のるよ井のいて。四郎八方をねめまんして。わいまちちぬ

をぐかとうかがへば。大塚権左衛門。武市兵庫が首をとりてみせさせうんとなりをうちかたぶけてこしにのりそゑ。絵をかいて進ぜけし。爲勝の又神の。蔦をうちくやんと。血氣の勇ものどもへよろ。一柳主殿ゑ。おれ権左衛門とうすかくとおもうて味方よりおしこれでうしこまりて。おがへの伯耆守をかんでうりうる。彼阜ぐさちと。勘平よりでけやくといつまもと。後田権左衛門。おもうけふさがりて。五騎のつをのとたうひ。勘平と権左衛門と一騎打の。佐藤兵庫頭。手負時。敵の軍おり。権左衛門へ。先祖より。敵のそこをよつれうとうへられた。新手の勘平よつさふせうまどわへ。首をとられよりり。勘平。打とる大喜わげ。坪井七兵衛を

をへせぬう。東方ぐさゆて。異神とうてへうる。大塚権左衛門を。をれトようちをあいが。中納言殿の。佐藤兵庫頭。紀伊守。紀伊の。紀伊守。紀伊の。紀伊守。紀伊の

ようにて。こゝの郎よまうせよ。ぞやくさされよとの仰せに。こゝ来ぜひなく三ちりぞく。彼中ちるこゝや。弁慶よ。絵をもくと合せ給ひ。世一の月ぬしてうさ。郎よ弱きい虎うそうくのいさかる。一百八騎めぐろのさ負。安方さうれぬあ武ち。若あ一ちこゆうきれのくぐちぐうく後負ハんくさつ一ぐ。彼のとうして。弁慶つうるそたをて。百て。彼中ちるイうんでをり。貴をうん。ちを給ふ。だまして。弁慶ぐでとをさわぐり。ひんぐとこそ。ちつ。彼中ちるんくうと。金剛力を出して。弁慶ぬまぐんでうをいておげ。をさあぐうんくちろ西ハ。ををさまをうくをいを。伊友を三陽をかされ。を方貴ををれとの。伊をよまうせて。を三陽刀をかいて。弁慶が貴ハうちをを。を馬の伊をてぐうさよをそハよ

そりゃ又城尾郡の住細田氏アヤ沢田四郎等数十人の新兵
となりぐたいそうくあまりよふう入りて討死しそうそわる
かれ。彼阜ぐさゆもとおほ田友田等よて入城の儀事ありれ
ばうけ引とりよ響をあつべてたくひしうぐ大勢よれまられて。
ぐいのくの討死しそうぞわるもかり。実よ百ぐ新おへ。お
造あをまりきぐ。素ぐ手勢ム十騎。人ぐ。ぐ討ぐて。一人
加うく生ありくう者もぐ。ぶうまもをいてひへぐ色いまぐうまを
もをいぐ。ぐ勢もうぐ。まのこりしとうへうぐんううと
ちもも負軍ぐまぐ。ぐんぐうく敗軍せざうさうの実を
引て。彼阜へ立入り。町にをうあ落へけ表の合戦い来命
ぐうぐうよをてうきてあとうり引とうべしぐうくうせひへ
とをうめれば。本造さいそうる雑義の場ををそうぐ。

へ引ぐりぐ。ぐ義よのこまうをとうぐうぐや。身一世上のわざうり。
武士の面目これかしと。引ぐさ神ようへぐれぐ。紙おる板
くふ光よいた馬ア。ぐ。ぐ。ぐの武勇をたて。うぐの所為武
れがしめさあう。腰痛といそんうまよ。四日の軍ようあく
しくたうい落ぐ。今日の面目ハそれアべし。素とぐ西沢実
ゆてたうい落ひ。あ人討死仕ぐ。うぐの仕雑義今日よ
あのうぐまうべし。さうとうぐ。うぐの為よ腰痛の名紙。う
落へといあそれぐ。ぐ馬あやまりていたぐ。形金の儀事を
ぐうぐ。引事の拙義とだうねぐ。うぐの仕ねをうす
ぐさうり。ぐうべ引ぐうぐ。ぐいぐん実をうをぐのれて。
あとうりうあうず引落へと。本造ぐ手勢をうりのつめ敗
阜をうてぐ。引ようう。ぐをうぐうり敗阜の軍勢。ぐん

や數小うて本道こそハ川ゆゑ
て人るのあしゝかたぞろ
此ゆあてゝおぐみそてゝる西
一人とあまゝすゝと武藤掃部
井弾正。同じく若狭守。武藤清左衛
弱隼人。安井右馬。堀田右馬。吉田平内。八條吉十郎。
紫市左。索勢弾正。林右京亮。小坂助六。堀田小三郎。
和さゝまとれいつゝ。よゝ敵をつさふゝ
ふゝて。粉骨のたゝらさ。名を後代よのこゝ

(三) 堀場弾正忠清馬の事

宴よ又沼田輝政いの河よりゆのりゝて。波阜ゝの。
の乗ゆゝぐをゝて。ゆゝを横合よゝうてゝかゝる。

一都。清洲ゝる。尚と。麾をゝいてつさゝうゝ也べ。波阜ゝ
の軍勢。とのゝ也ぬ西しふゝゝゝぐまり。実をせんゝぞたゝい
ゝゝ。されゝと多勢といひいさりひつよさ東西場よゝ也ゝ
あゝんて敗北と。波阜ゝ作右衛門ゝ。こゝへしゝ。月は
信まの左司ゝ来ふゝとゝ。武を世よいゝめゝしくのゝりしゝ。
今日の軍よ。一番よ逃ゝゝゝ。ゆゝとゝいひゝゝゝゝ。ゝゝゝ
さゝゝ西ゝ。飯沼津田ハゝゝゝゝゝゝゝゝ殿ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ろ代。津田ごろ息友三郎。塙瑞義三郎。あんうし合せて三騎ばかり。あんひさしてたゝうゆく。あまをとこてへたゝいろ。実よ塙尾郎の伝。北くに長柳十六郎。塙瑞義三郎ゝ合。矯をとゝ〳〵お拍あてたゝうし。塙瑞義ゝ合のひらびよ。北くにご方のゝうさぶうくゝとあゝうとてぞうまるのゝよろゆく。塙瑞の卫ちびめご田よ入やゞて義三郎ゝ源田の中へをらよろ。北くにづゝそ。源たゝ〳〵さゝうさまに源田の卫ちびめご田よ入やゞて義三郎ゝ源田の中へをらよろ。北くにづゝそ。源

を。をいつめらるる大将よ。よくよくとおもくして。淀川中路も。
つるよいゆげてゆかしをでる風をもしよるさひを。黄
昏よ及びそれば。東西南北。新田の搦手引くへしと。芦
路新加納よ者陣して。秋付の月ゑさびしくもり。永
の新紙あるよりよそう。ひろゆて中納言秀信まへ。今日
河越の合戦よ。うちまけさりしをひきんよるひ。東よ入て
組ひとどもをめしあつめ。あまりといへば今日の合戦ゑ下よ
敗軍せし事の口惜さよ。おろし時の不義ぜひよ及ぶ
何ゝぞ明日の合戦よ。一しかるみ人のあいぶをのく城を
拾うて。討死をべきさし。組ゝの兵卒へおも
ふまゝらまゝと。おりそれば。本道うけ給りうしこまりぬ。
今夜新加納へむひひ。ついをめどもるまへ討死仕りぬ。又新

紙の掌へ。をぐよをそうせひとあまゝ。十騎の組へ
やゝく三百騎よ加りて。あひうさ籠城。あてに死ひ。さり
かぐう南城東とあへ。谷ふゝくそのをまへ源田をそる
の蹄もゝらぐうたたの掌へ。松柏生て
陣くし。ふのゝくへ長川截岸もつとも絶張ぞれば。ひ
三方へつよだゆを。人るの直流もうひぐうしこに真
とうゝ中月へ天狗ゆうばゝを知ず。せめ入るこ泥へ。あゝど
あのうくへ七曲遊手搦手三筋の海検地こそうつまり
くの雑兵ゆて。身命をおしまずこをざかばいうゆう韓信
樊噲もゝうちくせう入ぐゝ要害の籠城よ入ぐ。皆て
必死のゝうゝ仕り。三日もちうゝしろなどゆへば利運へ
たるごてろのうちよひと。ほひるやゝよ。のべてぐりぐゝ

名。くて東軍の者ども。毛日騰のまくりに接戦に則
田中治ノ左衛門尉。同じく民ノ丞。加藤左馬助。
桂源太郎。高名。敵を作渡る。生駒雲州。
高沢志摩。廣高。嫁決。長門守。猛。
政井伊兵ノ助。補。政。中多中務。右馬右。同じく
英法。右政。荻原。西英法。
私代をあつめて。無軍物これなし。騰のまくりを
主家を敗北して。生涯を。
中との。伯をまくりを。
ぐこをあせどと。
まり。ちだく。評義をついやとく。
かし。附よか義。

評義いひくよ。政鼻をのりうんと。
ゆへ。元義。
ありとと。政鼻。
んどろよ。
ろさい。
とっくく。

諸家高名記卷之二

諸家高名記巻之三

目録

一 蓑浦新左衛門七左衛門事

附 林小右衛門事 切腹仕り

板浦源五郎 相果て討死事

二 沢村市左衛門小銃撃の事 拳銃の事

附 吉村文右衛門 槍のうへ働の事

畢竟又八郎敵の眉を射たる事

三 大門林氏昌伯を殺し事

附り 信州沼田の城主真田幸村合戰の事
山中清左衛門友信と二二の戰あり事

四 畠山殿の働國廣を元事

附り 京野修理亮切腹の事
牧原常陸介捨身の事

一 美濃浦新蔵人七左衛門具定元事

波阜の城主十八町者よりあつて。陰謀ある由あり。
山石と新城をたてて。畳を城。櫓をあげ。外様と捕を
拵。さらに未だ引けず。面治あり捕ず。人指原表者同ド
く因幡。河内なる物。松田十郎。紀合三郎。能登守
こゆる。殺害山三ケ所の。些の事ひとつしきこゆる。そ
愛宕又 八月廿日の夜の刑ち。殺害る山の小山
とよ。東西の軍勢しむろして。人数のをこりこそ宮ま
ら元。実と左京亮幸長の軍法を引げ。
まこくふ指櫓をひらさげ。国ドく西の山元。敵方ちせも
のゐる。城中の者ども。○て敵しる事なれば。つまりぐ
れ藏。西。東隠れよ弓鉄砲とふせをして。愛ごせんこそ

ふせぎたゝかふ。もゝ手の弓矢鉄砲よ。弓場せだヤぶんぶひとつの
よゝもあらぐ。ゆたかなりくちりの山の東間ぞうくいおびくるゆ出れ
ハ作磯をゆ稽よとり。稿麻のぬくむらぐりぶもゆ弐月
南よ村をるめ！さうにわぐ矢いおりりり。さるゆふもつて
多負死人背時のあぐぐよ。教されぐうせもゆもよ稽場
してぶこう粧縁のていぶぞんへよる。幸公鹿をふりあ
げ。敵へゆ粥ゆるぞ。たぐぐもめ五月よ。ゆふぐ鳥かつぐもて
と。男をすゝめて下知しゆ強へ。うこゆもめて軍物ぶぶ
ゆ。ぶぞよ公方ぐりぞせめぶもる。ふも
ぐうゆて城のつゆゆの。本戸ぐちをさめゆ。稲面稽て
やう。ぶぞよ城ぐ潜をせんぶんゆ。のゆ敗の俵り南
く。ゆゆうゆもよいんゆ百ぶいて。四方岩敵の湯く

さうゆて又宴城のゆもんゆとるゆうべ。大死せんい必ゆ
ぎやよトん城つ敗ゆして。ぶふゆぐよ防戦し討死せんよ
いゆうぐとよ。ぶしゆぐぞゆ。ゆうぶもひゆん。法華経ぶす
まをつゆてつゆて。ゆるぶもゆ。ゆうゆ異浦新蛮。系法
三高。ぶつぶゆよもくみゆる。ひ異浦いゆれもゆぶ。大ちゆれ
男ゆれぐ。三人あまりの大方ぶ。おふりく。大場よもゆし
あい。教郎をゆうゆてゆうい。ぶよゆ敵の員ぶゆりぶぶ
しゆうんゆもし。ゆよ。城ゆ。ゆうり黒華おぶゆの強よ量
胄よ森の郭をゆちつけ。七ぶをぶゆるぐゆと紫よ。ゆて。
大ゆ力をゆゆゆ。異浦ぶゆゆけぶぶり出ゆるゆゆゆぶ。ゆ
たへゆし。ゆ愛のむゆし。城ゆ。森ゆ来ゆゆぶんへよゆゆゆもり
よつゆくゆけまり。名のりをあゆぶ切むゆぶ。異浦ちゆゆを

をいろうず。大力を恃みて。ひぐりにそらいたよせまりぬ。
よわくうりしろよまりぬ。とてもみざるく芸法ゐく。強勇と
雙ん出合し。其色のむしゃくやん。猛よそうの軍
の死と。敵もみざるくもうこうぞのこ。ぜ人ゐ揚面へのなぐさん
拍せぬおりうり。やちぐらくたくくしゃ。猛芸大力をあて
とされ。ぬうとのぬんとるる所。其浦すうさど切つけく。
つるよ切たてし。貫ぐらうて。ちげくとを除さてぐり
よるる。おのちまちまぐらとうこの人こちびったいてなり
にる。又原信三人こうこゆ精芸のまたまみて。猛ことず
志の猛をも。注うゐしまたとうに程の名人まで。むうふ
敵と又六十騎。時のあぐよ付ふせうり。猛芸とこしちう
むしの兵。清肥表七ち。伊賀八郎つ引入敵よ追つぐ。付

入よせんくちられた敵芸本戸をやく閉しまちり。猛と
のうんと。一騎よ表七郎。つでいそ伊賀八郎つ同じくく又郎
三人ゐんをくのりにて戦ひしゃ。ぐよ程よとうとて。一和
よ付死をしうりる。家よよこ河の信人。林ゐ左馬
たちまち本戸河切ゐぐりやこの軍芸武抑入てのりる
ぐしと切ゐぐる。猛芸家をゆぐれしく敵さうをうく
てつくうり。四でいんとゐよむ。ゐ年つちうず痛ゐで
どうふりて。ぐうこをうしてうちりぞく。友松踊れちうこう
敵をつくうをんと。ゐ年つよ入うゐてたうひしゃ。猛芸味方
を付ぐしく。とうくまちもゐく友松をうくおたをす。されば
甲をこをうゐ。友松やうぐてうこゐぐう。ゐんうく敵の員を
うる。うしもゐやうくう勝負ゐり。うくて敗刑のたくうよ。猛

知行等よ討死し。みへふうを[illegible]
佐[illegible]ものの子よ。板滝源[illegible]重といひし者よ。敵
を[illegible]引んでゐる者せんとんげけ。八方よ目をくばつて[illegible]
く組組とる所よ。敵の大将拍子表ろ。運命こゝ[illegible]
まりゐん。板滝よ[illegible]ゐるとゐ知ゐ[illegible]のゐ[illegible]拍子と
切むとび拍子さまぐ[illegible]板滝切こゑ[illegible]。つゐ切
首。首をとりてゐ者のゐゐ。拍子よのゐゐ軍者[illegible]ゐる
いゐゐ[illegible]。ゐゐ[illegible]。この刻よ義盛して。後時のこゑ
天よひゐゐ。山[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]
ゐ。二[illegible]彼阜の[illegible]ゐ[illegible]
ゐ[illegible]ゐ。源[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]
[illegible]ゐ[illegible]ゐ

勝。一ぬしとなりて。四方八方へおげよとり

㊁ 浜村孫兵衛小銀杯手柄の事

家よ又河漢たる勝ハ。彼阜沖縄云奉張よ志ごひて宮
ゟ引ゑてぞ九よ猶銀ゟ。木造ゟ。津田藤左ゟ。同ド
ハ度二度。百く銭お父子い迫きの亡曲ゟちよ志ゆて。弟
命ゟとて。防戦ゟとゟ。ゑ志ゟ志ゟ志ゟ志ゟ
ゟ志ゟ志ゟ志ゟ志ゟ自由ゟ志ゟ。ゑし合せて。ゑ志ゟ志ゟ
ゟ志ゟ志ゟ志ゟ志

五方ゝゝまとゝゝかさずしてぞゝるゝあ谷へころびとち。歌
ゝゝゝ

をれよかしとそれよと。のぐさまるる。同じく畠山又八郎
ようさ敵とうけんで。首をとりて拍子ゐが。腕の力やつれ
ゐん。若殿へえをとす。みゐうさの若を見てぞ。やとゝ
る人も有り。又ゐさちゐよ。あざうゐ〳〵やうを切り。又八郎を
と突。首ゐぞ〳〵さめゐとて。敵陣よりけへ〳〵ゐ。ゐ多ゐよ
まゐうし。敵乃首をうちとりて。本陣うして入ゐぞ〳〵じ
めゐうひし。掌も移敷せぬ入ゐうゐう。此時よりうして
さすゐの武義もせんゐさゐ。なれよれのゐゐ。秀信のゐさ
りくゐて。若ゐゐさ法田義三郎も。糟改の主人生捕よけ
ゐ。又福島の家臣梶田新介とて。義を人よとぐ
れ。ゐを剛ゐて。ゐゐへゐ。大勇猛のゐぶ
きゐの。敵大人よりうり合。二人へ長者よ首をゐり。二人

よへふうまをあふせ。ある二人の若きをぞ。ぐりよりんこ勇
名。そいさかぬのおそろしさふ。二人どいとぞよけいなる。ホ
遊女つがを物。百姓弱七曲よりつのて出て。近まれ山によ
てふせこ。我ひそう。を中よ奥ひとつの者。保えの名物遠
武の中るゆとをそうぬ程の精芸。主夜のうに人ぐり
よ十四果の大矢をか山のかくしつをひしうしをを
釣ゆ。てらうとくく射ふるすきしれよつくむあられ。
板屋をうつよ板ふてうひ矢よわうしをきの場ぶいを瓶
をうう。又い面屋よ丸をうをありて。ぐいくをてみぐり
ふり。七曲ハ板屋を墨。ふれ長池田ふ身。一杯皆掛ひ吾
ホ丸よらうをゆへ。井ハ山ありをあのが。板ハ方ふり一夜
よ附のこふをつふり。合敵螺貝をふさゆし。をあさ射見

で。山西をふがし。矢地をふがいて。ぎあふふる。若村又奪つハ。山
丸の影撫へ歩入て。河をこうとんをわ。ふた。総数十人矢
たよを射つふて。歩ふのあいてひくふり。若村よ名のりふけ
ら。て。撫をふめ。松茶郎家ハ以法師武者ふしまよ
いてむをふひをやまふ。を丸貴をふいてこのふりふり。
武尾集人いふをぐく。嫁よ五つふををよやぐふよのんこ手
ふを。家人間能平奪つふ。をふをふ。ふをく
嫁よのりふが。己ぐ手をを。ふ出ふ。ふ人名尾を引ふんを
を。集人いふて。ふ代敵ト。嫁をのりをんやし。
自弱よ嫁よふしやあぐり。を敵二の丸の門前よ。強まを軍
物数の人。敵ヒくふをあつまりて。ホ丸へをーーあんと
を。ふをふふ。ふ射秀信よ。ふをを自害をふ人ふふを。板屋山

解うけたまはりて。自今忠臣をひるがへし。忠義をいたすべしと。
ていねんしていてつかはれ。ほうこうをはげまし。
うんと。切腹を制して。ゆるしぞ給はりくるしゆ。
ゆ。家人十四人隊人の法にて。新加納村の原場へ入
三重に構をうつて。藤堂の武士をさへうるゑ
のいきをとめ。ぶりよ壮んにして。ゆるされ
生擒をうけて。義隆の振悔いなくさきよりたくさんなり
(三) 大阪の林氏長伯をあざむく事
吉田安房守。同じく作左衛門。又三人。壮
列小山を。その出仕をうけ。ぶりよ。安
房守を作左衛門。郷士をめぐり。義隆信列を
ゆ。敵の名代をうけ。芳門をうつされ。さ

たびとなく進撃のついでよ。安房守を退治して。軍神と
まつりたてて。数多の場をふり幸し。信列上面よりひさ
ひ。敵名代数大し。田を刈せられれば。敵中より出て。
退んとせしに。敵壮なる元ゆえの郎人ら。出ひらいてお戦
ひ。敵中へ退こめて。敵去又つゐて出てあいたくひ。ゆよ場と
あるひより。一二の門のあるにて。作田ゆ。山安清義。所表
作左ゆ。退出し退入。月金をあげうつてお戦。又芳門ゆの出
ゆ名中山助ゆ。左田長吉ゆ。名金表十戸。辻ゆ泥。田
年。所表久左ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
られよりんで力戦と。大久保牧沢の軍ゆどゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
れてゆいてゆ。西よ表所時ゆ。ゆ。ゆ。軍場ゆ。ゆ。ゆ。
れゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

刑法田の掘る。主馬佐賀右衛門信幸は、親子兄弟眷属乃
ちひとりとなれ。そなは対ちさげひ。上田のくせをまもひろ。彼
方より佐賀右の蔵宇。法田の掘りよ居て。どうもとるは。家人の
うちより。ぐうりとる者しあり。やせんとやあくんし。信幸が
陣ありてのうち。宿をたのみ書おのうさへ。彼をりつて。
さうこいづもとるすあそ。さで。つもぐくよおうすん。ぐうと
てもとのさをり。いざや中掘あも。ちうたるまうりぐさま
んと。いと慈切よ者づもとうくいぐもとさぐとと。法
ど掘へで。ありうる。彼くさあくのうてうて。高をつて
ゆさうくいぐれくもあくのうてうて。ぐあうぐのつもぐくを
ちとし作りぬどそもとぐうくへのちまうぐ。度のうつまのよ
と。ゑうてあうとび法望とうて。一人を掘さうくさずして。人

質ようそうとあ法よ。さうとうこうこうあうのうのうぐ。ぐうつ
ゆ。ひ信幸の蔵宇。いゆうう勢の身ありて。容義と
いひ。ぐうまを世よまれあるは妻。くそひ。上田法
紀ありそれむ。信幸の大抵ぐうりうぐ。ぐそうのとを望
それひ大的の方腐の法とくよ。たうひのあの。法候乗よ
あ法あうそひ。此を屠らんとして。今我さうよあひ半
ゆ。これよりして。武よ達し文よあうくうのつ人とと
とあうぐあるまりのうそう。ぐ法長紀のうくうよ
韓右韓ぐとて。父の者あり上ぐ。一郷のみしう。
又い紀弟ぐこのんで武を法ありあいあ文をたりゆむのく
ゆくど。南ゆ切し世ようそれあゆ。高八橋氏として。容紀美
質の身女。ある時うくひの敵あうう。爵縁をれりく

して。父の韓信をまねきて。郎君を郎君してぞ。ちまち
剣をうの敵とぬし。ふのうちをうつこそうたてそれ。韓信
いつよく義をつくして。国をよしていつくそれ。ちるを韓
信殺しよちくびを焼よをこして。月日を過りそる
をいとふ。ぬせ敵に呂伯るといふ者あり。元来韓
歌の美わるを好ゆ人。韓信ちひそくを賜して。韓信が歌
人らを。皆く我をよりえんとす。呂伯るこれをのまれて。
をでよ韓信よ。つきちくがんとをる時。韓信ジ嘉元祥
氏呂伯るをよちづけ。ひそくをいてやりこがを史韓
信。ひくびを焼の軍を利を考ひのふとを。これを日
ちうの人なを色が又ものや軍を利あんををうがてそれ
を史をくが討死をおりふ。さひくばは身を修りをうを。ものの

まうべなるさまこそり。そのさとこそ。ねの文とたのこゝ山家と
おさめ。二人のあんどりあそこ。そこどころこそでそんう。ゐ〜どん
よかりしのゝかゝ。ろいりゐ。さちろ〜をそんし。ひどりれか
指を切てつゝ〜それべ。呂伯るうして。林氏よ指ゐあるる
あや。ゐこどをかゞ〜て。よ縁こびいよく山家へ。れこそおさ
めゝうさんゐらべ家人と韓ちへ付ちさゞへていあ〜うゐん
と。たらまう約を変ゞ家ゐうあ。韓うを境ゐて
討死やゐ縁よう。そよよ聖よく。縁りを結ところよ。
ゐひのゐ韓う軍よおうゐて。堅固ゐて物ゐ書
の林氏ところんで。ろすのうちのてゝうくをそう。
くゐうりてゐざめ〜ゝ。安〜う韓うちさよゐう。呂
伯るを礫よりけよう。縁よ林氏ゐ智墨ゆゐやうう

雑義をのゐゝう。今のまの田の麓中をゝいそてうゐよ
をゝうゐさと。子世の賢如よりそへ〜ゝや
四 墨作岡義の働を図義を示す
家よ会津宇和家揚い。奥州〜下北のさくゐる。最
もう白河の城を。草絲ゐ〜ゐうを。合戦場よりゐ
絲二里ゐあゐ。竹本を切ちへ。家宮堅固ゐて結う
けう。又ちゐ新絲の城よ。第四ちゐ。会津
宇へ三百餘騎よ。墨作岡富田ゐ堅を絶ゐ〜ゐて宿
城をゐけて。伯耆に御川の城よ。濃田大隠岐ゐ加場
ゐして。東丹後百騎ゐて。そこする。白石の城よ。林義
綱ゐを義ちさゐ。中うゐ山城ゐ。ちさゐ〜ゐちさの
城ゐれた。間ちを入て会宮の寄係ちくみゐ〜。甘勢

伯耆国へ流名。伯耆はいかくことを義ふもと和ず。会津へ所
そのひまよりまさむひすもとづり軍会城出して。大ふよか
れとぞせかよくる。されば伯耆はげ弟式部ふぞざうて。部
くようこそ出て。ふりぞく。やがて行会ふ事。入う
りて白子の浦よりそこのり。あすかのさへ小ん浦旅うち
こへて。ちのぶの船よりけ出。次田大炊車丹波ぞこりくる
柳川の浦をいれまくる。まさむひ二方雑踏ゆて。後詰お
ものへうつて出。とぞよ軍ぞそのへける。くして会津軍
人。器伯耆。ち柳新。ち集。有野伊豆。永井右兵衛佐。
右馬。小川伯耆。図にくく去伊兵義弟。新会ゆ十踏
の士卒ぞちさぐく。後詰の浦ちり一里だりとりてぞる
ぶすさむひの軍勢入る伯耆。踏一

方々の士卒。後詰へひとうくちりておたる
会津軍人。ぞまらぞをといふまくに。時のふをとる
うざるくるよ。ふかく後詰の浦へゆげ入る。されたの八人
の者ちへ。ふかせ多大軍勢ぞいとそ。雑の紋羅の羽ざ
よふねさくよ。引るぐさそひねんかれく。厩よぞ流う。
伊達の軍勢。よぐるやりだるとあまさでしぶまさむひ自
別のそくらくよ。ぞちてをちうる。器伯耆ふろし
ぞそ。ぞつそれちち敵やしくまくに。雷光の激ちるかく。
とびうんてくのしくうてべ。まさむひかさくぐ流す。
踏つかぐつちげうしへ。項ほく縄豹ぐるとのいぐく。
くくそあるあとれぐへ。ぐるぞれを手ようすをとぞず。ち
ちくく鼠ぞつぐんとそ。双方へ引うる。有野伊豆。伯耆

よ入うとりていそぐ鳥とつぐをどーぷまさひ○よ切てそれ
べ拍くしわとりてまくに。こうりつけくとうさまゆこぐ
れの方を流ずすし。るよをこうりてまとそれうこるよ
てうこ吉柳新き鬼ぺ。わくちちくこれぞんぐ。於此で
たをけんとを毛ぐべこそ。くりてまさひ○の方風よ
そどろさ。ぺふりてゆげこうり。伊達家の軍勢那
を。いさくよいさくつ。をいいくくうりまくれば。会津九勢
いっひろいゆくわくをもこずして迎よくり。伊達家の軍
勢。ろよさまよ進まくり。揚時つくりて引よくり。それで
後鴻の橋間。ことのかよせだそれば。宮城のかよ擁を振
竹束をわまくつけ。陣屋をうけて垂居くり。器備ゲ
くくくこと。家揚ちくうよ鉄炮をして器鉄なと者を

あらため。郷の服織よ。国府そくてぞつくしゝろ。又都
川の海を。源田大炊ハ。侍を家の軍場又子館をうち
らんと。石をよ人数をんくてうさろ。さろ行よ家場ハ
江山城がすめよりて。家ごりをおさうんと。まづ一
番よ吉日右馬つ。二番よ芋川伯耆。三番よ上泉を水
こを勢総合二万二千餘騎。吉江が旗本のごつあ八千餘騎
をぞよ出羽出家よ山ぐさの海へぞ。よとろぞ
ぬい山のうちちりぞくさへべし。たし廣く行のさろも
あくしぞくさ武者ものもぞ。ちろべしとぞ宮めろう。
中途ちり。山へかりよろ。ごを細をく中よ。山のろよ
ついて。懐屋神能雲中ぢさうへて。山中よ山ぐさのえぞ
場。四ケ所たひろり。神能雲の海ことを。吉江山城がさ

うけ。吉日右馬つと。和吉ものもぞ。海をろ侍をもつて
山さびぬ山ぐさへのたくさ。山を義よ海をんちを出ぞ和ろ
あづろりゝ。ぬ。ぬろ世雲の海を。ろ逆よあのをくしよべ
山城ものを。素義しお遠ものぞ。石出されぬやろよ。を廣れ
ものぞ。ろしくたのをちるとゝ。をろよろる。吉日右馬つぬを
をまとぐけ。ものあるぞすろ。ろつしび。吉江がを陣をを世義
つを。ぐんのちしひをつまびろふ。拍ぐろをちろを。
吉江中て祝ぞし。懇勤の西ろをて。侍ちよへ西
の引出物をあくて。番細よ書筆をちてあ。ぬ侍ん
よこものをちし。侍ちををへてぞろ。板原帯陰
山寺を中をし。ものかよ三後し。吉江がを陣へ時を
うつをず引ひ。山城よへんを。けをろをを。敵

ちり間遠あつて。こゝこの所吉兆のやうよ。ちく元さこ殺し
ひか。雲西ふてゆうと。よがりこうつてぞやく。山城守ていうふ
もこゝ遠りく。ひつひ義面の首達う。とゝなれば明るの
軍勢はまづ山のうへをさうゝをこゝてこゝろせ雲のこうへさこゝ
手紙さうゝこゝこれよりゝ。こゝ陣中て越勢をこゝろせ雲
へ西へさん寺。こゝるべし。こゝとい存ぜば。三日夜つゝんで城落れ
よつゝこゝるべし。おゝゝ人数い作時もこゝるく。山ぞこゝをゝ。
根城をさへ攻をとゝいつて。えぞ城よおめそいたくいうぐ
ひとゝ。こゝるく自然よこゝすべ。よあるをゝんがゝるよう。へ
の山こゝり紙とこゝつせ雲へ西こゝとへ。紙紙三日城をく
へぐこゝをこゝを係こゝよのせて。雖西へ引入まをこゝせて。
こまあぐこゝよ山ぐく義城の。ぞ後を陣国ようゝんをゝ

ゝるべゝ。こゝ赤松入乃兵衛ゝ指引白旗の城ゝて新四
ゝゝぞをこゝ月。こゝ。こゝこゝよ紙事ハこゝるゝにこゝり
といへを。祝ハまつゝく元国ぞ。ぜひ越軍ハ。山ぐさへつゝさ
れて。こゝるぞゝゝとぞやくる。山城守て山陰こゝを紙ゝて
山へぞ。たゝ今のつまゝこゝんゝもこゝよゝへを。菜ゝ又元祝よ
といよをいゝず校城ゝといひゝぐゝ。歌のゝるよハ不移ゝて
て。こゝくゝのゝるよい吉兆ゝこゝ存ゝゝ。一城こゝて色うゝ
ゝゝてへまづ城援のたのゝこゝくゝ。勇義ゝをゝのづゝ。た
ゆゝ事ゝよいへぞ。越軍ゝつゝゝこゝべゝゝとゝゝりゝくゝぞ。校系
ゝこゝや美濃ゝよゝゝど。軍勢一国ゝよ。こゝろせ雲へこゝつ先
ゝ三日紙の日ゝ紙ゝいゝて。ひゝくゝと元ゝこゝ。ゝへ一ゝ元時の
ゝ元紙ゝあゝて。後地をゝ出ゝ。国西ゝりゝ事ゝ出ゝ。ゝ菜

なるべき狭箱あてまをいの死人ありてかしこのくら塩かま。
隙代色てをそるすそとくのく。く質どとれくらし。雑ものく
塩くそ。詰とりくら

諸家高名記巻之三 終

諸家高名記巻之四

目録

(二) 赤江山城守宗見の芸たぐうのこと
附 上泉伯耆守信綱の不見のこと
進藤理左衛門のこと

(一) 鴻巣近我子河内守近の和歌のこと
附 丹羽氏家臣の函歌をうらうこと
図九郎大夫力あて一方ををぐこと

㊁ 笹子義武若槻弥四郎の事

附り 湯原源助武義の悟の事

高野文義陰先碑の事

㊃ 大谷刑部が傅出陳の事

附り 横井治部左衛門切腹の甲の巻の事

横田内蔵助のるれ尾つをれの事

㊀ 垂江山城が水鬼の長にびうろて事

垂江山城ちひいさわひよ楽じて。備後の城へ引こもる。若狭

ゑでて〳〵振小屋をとり。備後のやりを奪見ろる。城ち

まりに廣さみ所。あるいい三所ぐりの。湖水をたくへてこれ

ゆいこり。山城ちゆ。城ちゆ。城ちゆ。こうしこりいあつこれよ

さ勇宮ゆり。こりゆ。こりゆ。山川をこれいい。山ろをゆちゆ。

こうとゆこうこうゆ。ゆ。ゆ。

の武ゑもゆりうごで。敵みうさをうりだ大将よりぬしう
で。かりくわらくへうさゆうぞかうりうろ。かうる西へ上泉うまれと水
ぶ石ぐ陣よりえ馬ぬしを。山海るさいとるうるゑと伝びて。
はたを武かぐう軍ひんうををみうちわげて結ゐれとぞ
あくぞうを水い拍掌だうりのうさゑうて。ぞ速よかけ
出し。ゑゆうこふのうをうし。出二出こよ捨を入て。こう
たのうのをたをけわげ。をぞよ引ゑくへ西へ又城
中ちに二石。か勢の人数代知つ。わげ勢武ゑをを
ひしうで。ゑ水二ゑ交こぐしして。逃ゑうんとせう
どを。城芸をひぐくをかりう上泉をまんかりまのう
こゆ。つゑるようゆいうゑをよう。ゆう者をををつめ
くゆうをて。城芸をうりをぞ引ゑる。西ゆをんぐよまつけ

らをぞくゆ目の軍よ。ひひんをゑうをんと。んぐををゆて
岩陣を。扶京常陸ひををちもあざゑうつていひ
ゑゑゆうハ。一ゑれうらをうをををを。ゑ水よハ組ざう常をを
うゑ。ゑ和の下和うをせよ。うぐぐくく兵一人ひひうて。
ゑ中の武ゑを挙らをんとゆう。お代市宇のふえゆ。
おゆれ軍勢ゆをゑくて。一戦をちぐゆ。附ゆをを合せて
逃ゑをゆハ。懐屋の城ハ。今日よ蔵居をべををゆをうをと
くをゆるゆをよ。城よ暴虎馮河して。死ととゑと悔ゆ
らんをのよハゆ兵ぐと。の結ひし。雪人の教戒ゆよく
ゆよ捨ぐよゆう。ゆぐてうらゆるべをを人ハいうゆと
万湾ゆうよけ。法武をぐををゆふありてゑんを
よ捨をゑぐをよ。ゆよの軍のていをゑく。歌のあやまり

をゝくりてゝみるさよりうぶり。おほくの士卒ゝうたるゝ。
世よむねんこそゝゝられとゝゝりよりよとゝゝゝ。そのゝ
のゝ湖あのゝのゝりよゆゝうゝゝゝ

二 信九郎秋月紙討せて逃る和尊の事

ちまた大勢よりて。五拾十人あまりとゝのふすとゝいへゆる
智仁勇信たゝ。智いまだ人をうべからず。仁いまだ人をあ
勇ハをうもとべからず。信ハ義をしかずたゝふるさんあ
らじ。ひ又ものをこそ名人ねとゝ称をうべ。又十人と
ハ勇ありて死をうろんじるものゝ。義ありてんとゝやう
なるもの。むさぼりて利をこのむものゝ。たゝて義よ
たのびざるもの。智わりて怪ざるもの。信わりて妄よ
人よまるもの。廉潔よして。人を惑せざるもの。
計こゝわりてんゆゝさるもの。剛毅わりて。こびゝを
用ゆるもの。酒をよ妖惑情よして。人よゝるゝぬもの。
くゝ逃あり時ハたゝるもとゝいゝり。たゝるよ

今ハ西ゝこの法たゝるよ。十ゝ日ハあまりゝゝりとゝいへ
ゝよ人ゝ。さゝよゝりて。ゝ西ゝ士卒ひゝびの金我いく
あんゝどあやぶゝゝるゝそよ。富田甲別の智恵ゝ
て。逃ゝ和尊ゝ紙ゝをれ足ゝゝよ川入。張房項梁の中と
なりて。安二の右ゝをもとべさゝ内通あるよりて。
ゝの清陳中。ひゝをゝ多ゝ。いゝゝ沙ゝいゝゝ。
相大ゝをゝへのゝよ。ゝ飛ゝゝ。清怪ゝゝ。
林原ゝをゝへゝゝ。ゝよ関東ゝこの作候沢井
ゝ。祖父江海。赤部ゝ甲。ひ三人出ゝゝあり。西
ゝこの相足清田小二郎。乾ひゝ。二人ゝ。ゝと沙あり
ゝゝ。ゝゝ伊の西ゝゝゝ。ゝよ君のゝゝけて
ゝ。歌足ゝゝこの大謀。なりをゝびゝてあゝめた。たま

たうとくしあるべき時祖父江孫兵衛。相模のもとゝりの
なれば。双方のまん中へうち入て。いうふんく後貴
を変とゝろへ。場所よくそなへたるべし。もはたるの相見よ西
らどやうとうさ勇士の事なれば。いさぎよかりハ無是り。
ひさとうさのまりうへと。制をとれば。をれより武代
してぞうくとうくて。治アの捕三郎。東軍の義をとて。
長川をおこて。大実村の辰こよむりて。人数をやそ
をうへうり。後おの中納言。大谷刑アの平塚因幡。戸田武蔵
同じく内記。山中治部よりありうが。谷川をおこて。関
ゝとうの人数をおし。西の山内しろよりて。是性をこ
をしうり。東軍のさゝま。後藤父子をとゝめて
て。海老筋を西へとりて。石田ゝの軍勢と

ゝ紙ゝこゝくて。実ハ当途と切むとゝぶ。双方名ゝ
あゝ勇士なれば。梓弓粉青の軍ゝて。ゝとりつゝ
ゝとゝ見へゝざりゝゝ。中ゝとゝ出。東軍のさゝま。後藤父子の
軍勢ハ海老ゝり出へゝて出し。八百騎の鉄砲をあれ
のゝくゝとゝかしうけ。矢軍をゝゝめゝ。敵ちゝくゝけ
れば。槍をゝろへ。小西宇喜多勢津兵衛の人ゝとゝおかり
ゝとゝせゝうて。後藤槍をゝろへ。時宇喜多ゝこの合
ゝく。後軍の神ゝ出しゝうば。後藤兵をゝろゝりもいりの後
の命ぞや。ゝゝへゝとめよ。一足あゝとゝ。しろへ引べうど
し。麾をゝりとりて下知をゝとれば。後藤の家臣園九郎と
ゝゝへしへ。ただるまれなゝ大ゝうゝ。勇ありて軍兵と
こゝさゝとりくふく。組おゝしの後ゝ。星甲をゝろひよゝ

し。寄手あまた蒐るよ。奥勢をいてのうち已に定
二すの大石力をふりまわし。むら〳〵敵ばさらいあくぐらを
くしるぐふすれど。おりて戦わいとろりのしたり。そもの
軍兵し。命ををしまば戦へだ。小西宇喜多勝軍して
名おりをのくらび三百級。福島のまへうちぐのうち。田中
兵庫ハ。山のまよりをせよせて。是程をしませくろ。福左近
ぐをのへをめさしの様。三成をのとろうちをぱらまさ
ぐをのかれと。役をのつてト知しくろよ。合戦わやうくん
へをれど。役の荻北廉〻助。左近よ何をいをずして。けり
こをろくたをひをり。左をよしをよ。さををの。をへをげさ
んとをしおよ。加藤左る助の軍場入をりて。坪内と
をざけよをたくへ。をちまちよ面ぐまを食せお逃して。

さんぐようちかされ。天麟山へそりよりつ。ひけよわろて。
小西摂津守が陣より。馬皮ぢぐ〜の鎧ぞろ武者一人
東軍より組候して。鉄砲の中納を取のこるいろ。歌みゝ
ぞたりぐ〜ぐ仕りんとやり付さりばさぐけれ鉄
砲。足軽又十人白き笠ぎる〜付るを。松尾山よりさ〜むけ
て。むかへ鉄砲を。二ゝへし〜打せられだ。鉄砲の中納を取
りて。面よりうたせ〜申。背軽より撃して。脇をくんで
ゐやうがさいなぬ。三田家がまねさよりて。内通あつて
ゐたりうよりの鉄砲よりちうをうて。赤尾伯耆守内
近松肥をる。二方鉄砲を引ちぐ。松尾ひりてゐる
とゝぐさる大関村の小れ肥よりそへとゝて。石田が陣の
らしろより。鉄砲をちうけ〜裏ぐりして。大谷刑部

辛崎関懐かそりへを長柄切らげせだ。小西摂津守が
陣中へ。我ゝさよりぐれむ。狩をを東軍をつあく
つゝふせて。分捕切名の手中より。石川伊豆守。西尾の
甲頸とうちとりて。公の賞検よりるへ。関ケ原
の一番くびしいをりくそこへ。家より徳田河内
と。戸田氏義と。詩庵のいさりひ〜てうんぐりぐつる
よむさしい対よりう。氏義の内股脇の長露を令
奪つをとりて。服前より。
さと。田角八西より切まりて。
て。氏義をよりこれでと。同ド松より付記とたを義のかど
こて神ぬなれうくよ伊丹兵庫。村紙兵庫。河村
助左つ。奥平左つ。一国よりこて。歌兵数をうち

とりてぞくまくまくこうぐ。大場よりてうりあへ。四
人一あり。松をかくべてうち死す。小坂助六。吾孫子太郎
稲毛三郎。松又四郎。坪内五郎。父子妻をかくべ
てこうてへいづをとり場殺の刷のうつ。命をおしまぬ者ホ
て。多場よりおそれどかむとをとび。板垣の功名沢でうち
ぐ。かうんづく稲毛。十郎ん。八方よ近ちに。
すへよりうとうるうちよ。忽紙とてこしろよたち。
おそずとびうれば。稲毛といいちずーー。皆稲毛と
ぞよだうぐ。くて敵みうさへぞれくくそふぞうり
とたくひーーぐ。手負死人へ数しもど。陸よ出藥
汗血暑よりの代かづす。同とあてこれぬこさ多ぐ。
よおのて友雲敵の玄蕃允と。面ぐ寄沢鴻左ぐ一

み。彩右ーーちだーーげ祇秘御とつう。桃城と。されを雄
雄つうされだ。玄蕃捨をうーーこよりげとて。彩右ーーひど
とくて。合刷力を出ーーて。せり合ーーぐ。玄蕃つのふうれさ
ぞ。玄蕃ぐ小性。丹羽平六郎生年十八才。子初陣ーーこ
へーーぐ。彩右ぐ川西武。よりぐうーーて近ちせてーーくへせよくいまて
よ。雅ーーくうーーと人の面の敵と。服部よりうとりーーと。弟平九郎と
らーーくへぐーーー

源氏平家の軍の時。見性武功の知勇。生田のもりのを
ちわしよ。瘴毒の知章のうつくをみつぐずして。弦
ねくことを永よのり。落らまつしと時運のまに。脚病をふ
よあつもど。にぐこげこのようをこへしを。みくさの若を。行をゆく
ていうやらいくん。されどこそ。知盛ハ。大ねの萃逸ゆそぐい
こあうゆへあつて。天下のるよ平氏をそこうりゆうく。命
のるふいあつざるゆり。そ方ハ行のるよ平氏うこをなぐう
よぐるぞや。命をもつむ。脚病ものハくるたよあつどと。みう
しさへあざうこへ。まつて。東軍をびうをたうこしこう
のぶんとして。平家のたねる知盛よくうぶる。ちうこうれ
て魚ハ。我みをぐふみつぶぬ身のハをとそうれ勇よいうつ
べくうど。あ行ぬをびく。あくぐんせうれなぐう。ゆくくたをいる

をくやめて。迎うをるのまさうまこそ和尊なれ

三 義経武者振の事

さきハ清盛をがるまし。敵みくこの勝り。行ハ代をもあ
なぐ。梅又小の光まよハ。高田・藤原。加茂田中・筒井ハ軍
勝。どいつといてうけむうふ。三源秀雄のあるも。近食て
食物をくぐんとぞ攻撃ふ。東軍の強ね。三ゆいと見るよ
つくと軍勝よト知くうるハをとひ礼道の強ゆハあの三
成ハをくぐゆ。雑の敵を強ゆ強ゆをうこ。一人を
うちとつて。その威威よあづうれと。御を奮迅の威をふる
い。士卒をくげまつ。まつをぐうよをあ入だ。三ゆいと今日ハ軍
仕振どる猶ゆくたゆ。ゆうの日々又勝利をうん。為義恐くハ
はぐうやく。信勝をいうあすゆ。りくうり奥州天ハよ

そむくるものなれば。あるいは負付死して。強りとどくか
よりちかされ。金藤法師文子四郎しゆ。宮長三郎高綱
角を合せ名のりをけ。おびただしく名ごたくしゆ。ゲンゴ
負いつるぎをりをり。もろ者ども。福島の剛軍の神ぞ。
名乗て。大音あげて。よだんなるわるし。みくること上様よ
ぶ合戦をちつゝるぞ。今一揉とおもとれい。福島丹後。尾
賀石見。長尾隼人。可兒才蔵。小牧一八吉村文助。大福
帝助。高月文蔵。寛意のもつむしやな。もあるもぶれ勇
名誉。名いくゞ名をそげもして。ぞすりくてぞ切さつ
る。さるほしりて石面方九軍勢。みず是是よぞ出よる。石
見を出流わりて。掛関あげよとをあるゝ。こまりて
みくるの軍勢。附のこゑをどりくわるをば敵軍ゝよく

途をしのぎてのぼりて知よりの馬軍一度よりるとけ
へてうちされば。我旗本のものたち。三分一にもやうまよ
と。出塵をふり捨へいとくいさめる法軍場。出下知のたち
うちもぐりとをあいて突こむ。そのいきおひ天地動ま
のぬくがり。出見通りよりおわて。をのく剛勝武勇ぬ
出洗かさる我場ゐまはれ我をらじとをげこむ。報
骨碎身のそこくいよ。石面ぐさの軍場。右往左往よ
敗北と大将の軍云。逆足こりぬまぶ。くしてたれさ
またけとぐらんだりに碎曷とろで衰ぬる。封孤河中
よを退こさはまるとへあ。多よいひさしを。その軍
のそこさまよぐゆやとらひ合されるる。板垣正則乃
家臣いづまもぐりとあるこせりかんづく。可児吉長

が池結をべつくへて夫ぞゆくしこれ。元来知の御
仕へて。だ長おこたること朱東の合戦よと。報骨をはく
ゆへ。を者の恩顧ありぐりしと。勝家の強こともそ
まこげ。もんず源人の男こなり。武士後りそころざし。
田氏仕る扶長。板垣氏ありて技ぬとくこり。
ひさしぶるよ関ケ原へむかーとりや。それでさんぬる九
月上旬より。美濃の中よりかい軍のこよして。関よころ
ぐの事こなり。ぬけがけはくて。出法度とそれいぶ
ん隠役よ仕り。事毫よ我ど。大こと年ゐ夕こ。ゆ代
ちづめ軍の行義だりかり。実よ石面ぐ部人責ゐと
しといふをあちこあのてる上のをちゐ武雷
よ言傷し。ぬ掃言名の登れとのぞこ。敵の陣屋

のまへをとおすべきず。さごとよくくの所へ。はらうしやかり
又夕暮の事なるよ。西郭の陣屋のまへ。一町ばかりよりづ
さ。爰なるのりうけてきて。方義今は憚ばくく。みこを
ものと同じ色いろなる種とそだ。横あひよりのりて出。まよ
ろ所せめてうしが。る場中まで。推参ものやいひさまよ。
合しが。可児が武運やつよりうん。敵みうさのまん中まで。
み陽軍ばくくを。おさへてらびとうされて。敵のこるよ歩
のり。敵陣のまへよのりり。んをばうふ。四めへんだうの稲葉
をとれば。敵見捨にて。怪びの時をぞあげよりうれより
してさのぜん。びをうる五へのりゆり。我るよのりくて。敵の
うる所をてうふ歩へてうさ。敵陣へ退こと。可児いみうさの

陣へのりゆれば。佐軍一度こゑをあげさうをもうち
ちうりとそ。ごみをかへてかめうりうり。もうあ丶敵陣大
文西剛へをこゑうこうへし。意大ねのうかれば。陣屋の幕
をべうあげて。出軍政をそひいそうけ出。下知ばうけ給
ううざう。和まこのうこうこうこうさ仕りううハ。佐ちんこそやうで
く。人数あげてうあうまくるる。そ成方義みくをものひらひと
さしあげ。曽我めうざてひ色うてうこうる。後陣ごうく
のうあうて。過寒仕まこうとだうあて。方義そまこうり陣屋
より引こうり。小攻合よを出合ど。後をとうざ。ハカ丶腔及
と合てあうこうしが。んこいうでアあうくんしてちのんで我陣
丶出ろうが。員をうりてと。こうう撰よ入べうさやうのあ丶さま
べ。付うりしくびどもの。鼻のあかあるひハ耳の危ちんど

笹の葉をしこみ。くびをとりてのびこり。そぐりこぼり
てゆくり名。とそこ東ゑ。北上実ケ原のあいだより。出陣と
ゆきて。はるまつり奥羽雲霧よりそなへさせ給ひより。
はへ出月中の末日の事なれば。この秋雪ふりく。夜そ
ぢうてはいろを見とれ見けるとけ。やうく正の秋ばら
よりそれけゆてよりそらでゆなり。そのくんぬそし
ゑ。板橋なりて出されぬ。そ方ゑよりそさうゑ
首をそ。実検よりそなへぬ。とうさよつさ。正則よ
ゑ。首は実検とやふ。ぞそこ越実検のそうよ。
み湯原ゑくび出ゑ。とおゆう責るのひ中。才義れ軍法
をあいそむこうる名ゆへ。ぞいとそこあそさをつて縁
将付ゑるべゑと。ねーまゑひゆやわゑ。ぞそれいくべい

ゆゑ。とのゑ才義よりおそ。ぞてうをさそこべうず。いそ
ぞめせとのよそこいて。才義れ関西より組推付ゑ。正
則ゆされーへ。海辺月のそそうゑ付ゑ。いくさくびをだひ
とりとれざる事のふうくさそと。此ゆさゑ。時才義つー
んでゆよゑるやーへ。けあいぞ仕せよゑさぞひ。逼塞付ゑ推
うゑーよ。とそそ出とぞめれぞ。ぞゑ令。付死付ゑくれど
越軍出ゑゑわとゑゑ。毎日ひそうふ。陣をそのびゆ。又五
ゆゑ付ゑ。ゆ人ゑりさそよりゆて。ぞいぞんくよいゑゑせ
ゆゑ。毎日甲ゑくびをあれゆ。逼塞の為ゑに発ゆへ。陣実
検へゑゑひぞゑく。切をそゑそさゆくびの。耳鼻のあゑよ笹
の葉ふをゑーそこ。そこまーゑゑゑげをてそこさゆくゆを後陣
ぞゑそ出実検の首をぞゑてあーたゑらくゑよ。九月

親ゝ[illegible]。同じく十四ゝ[illegible]のうちゆ首数十七。並の[illegible]の
[illegible]ありしかれども。これよりてさぐくと。上の山[illegible]
流ゝずは威のあまりゝ。今ゝりは並ゝ義ゝ者の[illegible]
し。あつされ指を西則ゝ仰下され。[illegible]
きりゝゝ。右ゝ義遍塞のあぐへ。中ゝ竹をゝ[illegible]
らさゝゝ出ゝより。ゝゝまうせて並の義ふで首だゝしゝ
入ゝゝとやひゝへゝまでゝゝ武の面目ゝ義ハ涙ゝ独ゝ
ゝり。西則ゝ指ゝ。そゝあをゝゝゝ。弥ゝさんゝ
はゝり。軍中ゝおゝて。ゝ義ゝ切ずて。敵のゝびとひゝい
ゝりて。我ゝ甲ゝびをれゝゝとゝ。ゝ右ゝぐゝくのゝり。
人ゝの面目ゝさゝりとハ天ゝてし指ゝ。弥ゝゝゝゝ。
ゝく武士のは。しひゝさまく

四 大岩ヲアの情か陳の弥ゝ孤ゝゝ事

さゝゝハ又ゝの弟ゝ。小笑村の中ゝ。首ゝ指ゝと情ゝ率ゝ
おゝてゝゝくハーゝゝ。ゝゝまれゝゝゝ。田中ゝゝ。今ゝ笑ゝ。織
田ゝゝ弥同息河内ゝ。右ゝ織ア指ゝ内匠。弟ゝゝ
ゝつ。佐久ゝゝ久ゝつ。同ゝく源ゝ七人。ゝゝゝ
て。世ゝゝゝ軍ゝ。ゝゝ楽ハゝ田ゝ軍ゝ。横山ゝ内ゝ
ちゝゝて。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ。首ゝ軍
勢敗ゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ
方へゝゝゝゝゝ。東軍ゝ。一同ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ首級。ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のちの人のうさ。笑ケ原の町で。西国へ一文字よりうさぎ
命をうばうたうた。後藤家れ信。梶田天堂つ。上月平ろう。
さ人のるれお姫さ。さうしとうあて大吉わげ法場ごうげ
ま。ちうりに下知をのくるゆへ。皆ふうぐまめてをの人へ
ぬうあ。ホノ人ぐうくぐいるど。所アいまさ十六者。あ
ねとの人ぐうくまんたくまく。梶田上月たちよわめて。雑か
くるを小あが雑て。逃まうノくをつあてうをうてる。
万里秋風。帰北をふさ。張飛の血流。孫権をひすとう
うへうる。雪廣ね軍が匈奴とたくうひ也をよをもや
まうしとうをおへうる。こうう合戦のかうぶち。大反
車懸をおづーれべ。切をそうしわまる死骸。不敵の川
ようなれういて。人の残ををうぐうと。法れひとへうこう

くまかわふしとかゝと法師軍勢の糧米ひしかゝゆ
へ。うるさくよあくこゝを横木の汁にて。そめうるうちあう
くれたいかど飢うちこと。食をべさやうそう法華経
よあぶーとてこゝこてめされて生米と食をべうすうう
ど脾胃を損どとつうへ。ゆうよひうーて成の刻よりはく
をべーとこゝこのむふまさせ給へ。さうとい廣大の恩意
ふんうう。微細の雑ずよいうをれんをつけさせかゝよて法
人をゝくくねーまうる。梅らびたゝ出を検あいて。敵山のぜん
のらび。遠うちの食義むかさいまり。石田が陣場小関村の
棚ちう。門おてのらびうゝ。大谷が陣屋をもさへさせひうる
十又日の夜よいうて。ゝ遠うちべーと宣めう軍
大夜ちうう。ようるまり。又も天山の敵せ。しゝゝく敗北せ

しうよりて。ゝれみうこの法軍場。汗るのつうをそやとめる
同じく十ある徳永法ゝ。市橋下総ち横井伊蔵。同じ
く孫右ち同じく他ち。ゝつ。多藝のをさへうして。江ケ崎と
ゝて。ゝ陣をとりてあうしが。石田敗軍の法をゝ宮て。
とゝをうへ。ゝ出ゝ。梨原山のうをより安国寺敗軍城ア
敗軍の士卒ち。ゝ法彼安良山へちりゝをんて。一人をの
ゝをうゝ。ゝ東軍徳永法ゝ。ゝよ
れいて。ゝび八十一うちとゝりてゝりゝ。ゝ作の色ゝ。ゝ先ゝ
をうへ。ゝ横井他ち。自分ゝ二のうをうをうゝて。他
のまつうゝうゝれゝ。ゝ公ゝ田員ゝへ行しゝび今ゝうゝ
功労。無双のうをうゝうをうゝうをうゝて。ゝ西員た
ゝびゝ。家ゝ大谷刑アゝ捕出陣の家中ゝ

やくこの内よりうぐのあやしみあり。しこうや九月十三日を
まぐ宵の祝よ。女房たちあまくこわつまりてこしい名をおみ
月の名ごり。国中うぐひとり名ゐんぐぐひ。たちことば
も。今の月のうへよりうぐ。をうつけても。房のちす
おがつっかく。四方山の物ぐうりーそ。たちかんどと吟じわる
いうくさらせ華しかどうて。月とかぐわ雑をとてめ。おそだ
くれうう。お載の本陰よ。大場のこをしていくわつ上こ
活ぐ。ひ。内室をうぐ。を雑こあり。ひみ女房こうち。
色いいうの事ぐくて。おそろしかぐう掛げちぐ。ぐ
をを西外うのぐけだ。おとこを教いくこま。一二百いと
くくくくく。腰をうく。懐天蓋挑灯。堂くう義式
よて遣募のまさ女ぐ。ぐ。ぐとをひとめうぐ。氣とたま

しぬを月よをうぐず。結をとめしてをて。寶磬せくこい
ちうよ。ぐすがぬくようをよをうり。を足安人ごとよ。ぬうう
あ。名れだ。ぐまうく。ぐいかりうぐ。ぐくぐの女性ちう
なぐ。ぬそれうぐひて。内室の血氏ぐ。ぐぬうをちまま
せし。性内へいぐ。ぐひへ大場の女房こうち。お後たちよ付ま
どるお伽ぐいくう。愛をひとひ。人いう。極楽
屋の家老こうち。出仕を初の西ぐ。次の弓ふ伺候して。絵
屏力のこうをうづし。験殉よいを葉を迎ぐこ。ちうよい強弧
ぐいしめて。守護の神ぬて。ぐうこぐり。ぐくの雑使。先
ぐの遣募い孤ぬめくこの。ぐうこべ。妖い強よくこどぬで
ぐ。いうるおこめてぬうう。ぬうこ。ぬ大場の者
うてをらんをくしてをこれだ。女房たちへ。ぐ及ど宿

此の武士よいくさ、先いくさ、名をあらそひ、ねらうなり。所よいくさわやしーぐるこころもあそびをとどろかさうくさ。進ぜうんとまうさんと。ふうとめく。だんだんの内よ。何のものぐくをおりうそう。それより内信坪立て。先いさましきもそなれど。軍のすをさくんる。又武蔵をもしめんと。高紹よ事を書をてめ。ひめく。光仰をつう刑アが情ハ。自害してそうこうるあつぐ。光札をうぐくを。さくくをもく。彼ハをぐくゆりよきる。うりそをあうぐ。ゆくる事ごとをり

諸家高名記巻之四 終

同録

一 相州の林義子礼儀の事

附 云田東雲切腹の仕様のう

奴友又兵小西とあづくくう

二 石田三成師乃坊へ子負の事

附 井の口村石性の女房邪心のう

右三房仏教ゆ信山坊まがられのう

㊂ 小村之郎左衛門人の金を盗中へ絶る事

附り 牛丹波九郎うを殺す

㊃ 西国番船の舞史沙方知ざる事

附り 福島四郎逢るの事

矢野太郎落んとする事

㊀ 相州林荒子丸物の事

さる比江戸石田治部少輔三成ゆかりの者三人ありけり。同郷たがひに三ゆかりの舞字多ト称する。陽代新系の伝をあいまじへてそこのうちに実ありと。三ゆかりの海賊まことしやかなるべしとそのつく木戸ぐちより伝ひ来れども。さらに実をかりそうへ不吉乃事のみをこへれば。新系いつよ及ぶ年来伝なき帰者をたづねもとくゆひろふ。ぞ。第くるなる。さらにてうく番をとへて。制しとぐむ

といへば。ほよい番の者ども。おつまてで落うせろ。今も西くゞ陽代の伝。新系のたくしぐ。まづふ三十四歳ぞ。ろ。かろ五へ。秀秋の先陣をしてまくるよ攻具をひつ

さげ。山上の城下をせめつひろ。時よ城中の若者うまて
ぶしゝうる事ありだ。こゝびゝく鉄砲を打出して。寄手見
とゝうをせざられた。行ゝと新手入うりせめつけくせめう
ゝう。右面三成ゞ家人長谷川右兵つ。せまのさゝを間通
しゝうる。そを城中よ突ちうて。長谷川を討んと城しゝうゆく
右馬つと城をあげ出て。秀秋よゝと高ゝゝうゝ。さうゝうろ
て城内の兵内。せまのうゝよへたかごろよ。ばざうて
んゆをくゞたくゝのうゝ。城内の軍兵どゝ何とゝうせバ
ばゝうゝゝわうゝざれバ。きのゝく書みをさゝうゝし。ゆゝだ
廣乃よゝゆゝうびて。一族よ腹をぞうゝたゝう。本丸ゞ
家人右面東ゝとゝいひゝものゝゝゝくゝゝくゝゝ
ゝ腹城よ火をうけて。ゝうゝ乃ゝ後ゝゝうゝうゝうゝされど

右面三成ハ。大関ヶ原ヶ二の寄手ゆく。結方ゝうゝゝの名絵
対ゝの駐留。今治孫武奥衣嘗。美濃守和国ゝ
ぬ。関ヶ原山のゝくゝゝくゝゝ。時のゝゝゝゝゝ
て。ゝそのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。右面家の伯。城後又家ヶ秀秋
卿よゝうゝゝゝゝゝ。右面ゞ藤堂ゝゝゝ。藝国ゝゝゝ
ハゝゝゝされバゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝ。中ゝ指津ゝゝゝ。ゝ代ゝ。ゝ時ハ。月ヶ一の
軍ゝゝゝ。大ゝゝまでゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ人ゝ国ゝ
ゝゝゝ。城ゝゝゝゝ。ゝ。肥後守ゝゝゝ。八代
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

の殺逆ぐらく。おろく濤列
ちう風雪ひつよりもつてしを
ち殺絶絵ものをたびさへて。音くへとけ入のころ漫か
くさぐくろう。実よ実ぐくろの位人お列の林義みとそ、
禅宗隆義の法師あり。びとびの芸孔よ。玉石をたら
のさうの名よまびてゐるうしが。郷人とあいまでう。
人をりくめ拙をうだいんとさぐくろ。ちろよ小西行出仏
法師よんつけら重。おくうりんとやちひんぐへめて林
義をまひ。さうせ。そ方の人おいなくの秋伏郷人ぐら
ちとんとけどいうさまあとゆへあろ人とおびくうり。さろ
よりて名のろかりけてびし一方のたねをつとめくうし。
ゆ知拙法当行出といふものく。戦場よものて。討ねとし

出ぐうく濤人くかりしうぞ。さぞ猛くしうりうやうんさ
れを新書義とる宗門ぱん。自然の法義よ遠。自害をあ
拙かれぐちくうくくの法義かりとそ。とかうちびよう
たうこんぐろといふものぞれ出てこをよりうまく我をうつれ
京都へとすーかうべし。さうの時よハ。さのの廣義よあ
づくうべし。又ひか拙をとも。をう方よあくさうかりとそ元石
のかを。林義をくつくし。ぐ所ゆるこをてうてもそんさを
を付ちさぐひし。部落六人よめくだをして。ちびをう
かくおうくう。岩子の拙の。義を石書をつとめくる。竹中
丹後守。侍義法ぐ拙方ぐ。山三人ぐしをつ安ノ
てさろをくよりけつけ実よくをりて小西をつめかうあ
ちうくう。ちやうさ法師ぐ命ぬうる。それちうぐ田安ノ侍

坂東又三郎。江戸の塚の妻人くうゆ。こたすの母人をそ
ふびしくあづうりてねどの毒をそもうろう。やがて又八
情のはなを除へりよくる。法師よい黄金をトされ。老者の力ハ。
竹中舟後ち抜仕りうとくゆ。行と事知よおめて。四民
こぞりて京之の出政務を怪び。世万家と祝ところ。
洋くうて年よりそうそう。子世のもてまさぐれる。嚴とか
れとぞうこひろう

㊁ 石田三成師の坊へ不貞の事

人の死ところ時よ。その人事くく。者の死ところ時よ。怪てふ
し。一朝の業死よ奉て。親族をなげきとところ日之。
万人を横横をうぐひ。ところずとい事ゆく。一々嫌
稽をしりて。福袍しよりさいぞう時。百姓ところう

ゆう事ゆ。業枯すをぐれいをべて美とゆうと。古人の
ゆげうーー百家く。掘しる西治ア小情三郎ハ。実ゆ京の軍よ
うちりうこれ。ちぐーーの命をつぐんして。ぐどめい江戸浅井
新井のはいよ百よふうく西びて居ちし。西中岩新実上
ようをうう。さぐーーうづめうしをくくちと。江戸茶屋の
谷ーいよ百へ。浅ーうちーーもよ高りせまぐりち岡ぐ谷れる
北村へたどり出。相法師とよ心の。俗よりくくちうさて。
ちぐうくん江やは。めうう。ぐ百よいうをを八家のよ三人つをひ
ーを。三郎ちうくうひーーせて。ちう人ちうがんさて。子金万孫し
旅ぐうよたうぐ。ちうれびみぐうーーようかうね事ち
へぐ百ゆてをうやうふ自害せでゆとをへち。死を一時よう
へゆうハゆやをく。功をう代よたうへうーーいゆ百

のことで。良ねのもろもろたゝかひあるれば。我も又此時義
よ。仰とぞのうまて身を瘻。ゆ立商のもゝをもして。命を
まつゝ。今一度びうつゝんをさんぜんとねがゆゝくれ
ゆさひころを。ゆゝうるゝ。細とされでくんおりくてを
うゆゝまで。若ごりい山ゝ。ゆれを。をもりひとまつをらも
ていうゆゝうゝゆを身をうゝ。ゆれ世よ出ゝろゝ。ゆゆゝで。
山川万里をゆゝうゝ。ゆゝうゝゆゝ。ゆゝゆゝ。ゆゝゆゝ。
くゝゝをゝひれば。三人の作を。こハ作せゝもおゝゝゝ。ゆゝ
く光を付をゝゝ。ゆゝふもゝゝ作ゝをつゝまゝゝひゝ
てゆりをゝ。ゆゝんゝるよてゝをひゝゝゝゝゝゝゝゝ
亂をゝゝ。三成ゝゝゝゝゝゝ。我ゝゝ
だよ悪ゝん事。優曇華ゝゝて作ゝゝゝ。ゆゝふゝ

が作せん事。ゝゝゝて不吉のいゝりまゝゝく。無ゝゝと制
をゝゝゆゝ。三人一度よゝゝゝ。我ハ我ゝゝ。三人。ゆゝんゝゝゝの
ゝおゝゝゝれゝゝゝ。ゝをゝゝよゝの作せゝゝ。さゝゝゝ生て
生甲斐ゝ。別ゝのゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
三人ゝゝゝよをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれば。三ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
我ゝの密ゝを。測ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝて死ゝゝれば。三人ゝゝよ同ゝ同を凡合せ。ゝゝゝゝハゝゝの
作せゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝよゝれゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ命をまゝゝゝゝれ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

仕ん。とのぐ神よう。こを。ゆくくさらてもよろ。
ひ者をのんでせ。あり迫めろ次男。それもりと三めが。二人の
うしろうげをんをそり。ん。がそくもたぐひとり。山中よたてをこ
て。ゆをまうまうふをさまゆ。ぐもりさまもゆくぐ。ゆうぐ家
もの。三世因果のたれをぐ。今ここをしめてちれり世よ
ゆて。よ者りたそ。ぐ。ゆ。ゆ。ゆ

をとづて者とせば。三ぬをくさやしてゐく。天よせまり地よ
せまり。井のこち村へゆきつくはぐやちのくめと問るとれば。
三男廣しといひかぐ。一身のをさ西いぐいせんとあんぐつ。
そのかりをこまつのせば。ちぐりくろ菜園あり。色さのとな
まろげよりまちぐめ。葉をとりて引ろぐさ。鶏の口くうれ
ゆろ。かろ西よ。ゆるゆしまれやしくろれろよぐくんゐさ
る里人。寅よさくろうてもとろけ。きやとらふてあやし
みろ。三成をつとをぐろうさん代ちびあてゐ菜しそみ
百姓をひそくふま神さつぶさふ沒身といひうをぐさのよ
ゐ食事をせば。飢ようつ西て西んぐさ。ゆゆ人を拾つを
うしとねぐひろ。ふゐき北人へとつをぐ。ろうよちのびぬあれ
さふをもうそしを。ゐろうし。未春まぐうのかん飯を懐中

ゝりゑあゝして。三歳よりあゝつ。きゝんしゝせ一ゑて。三歳
百姓。手紙ゝいて。ちでゝく。就そうくされよ。遊仕世ゆえか
るゆゝて。富くゝを思を張どべゝ。ひゝくゝよたのむゝゝよび
それで。そゝゆやわゝまゝゝゝひゝん。さゝゝゝが変ゆてゝゝゝ。就
ゝ入て。むゝひゝゝんゝたのゝまれゝゝ。三歳うれゝゝ。ゝゝくゝゝゝゝの
むゝをゝゝゝゝ。ゝを日のゝゝゝゝ

素盞嗚尊にて。今出雲國斐伊川にてくしなだを
を立ゆきしと。おいよ給こびゐおてり

三 山村の墓つ所人の金を土中へ絶とる

ゐて百姓。田中家の侍。浜田在墓つへちゐづこ。今和歌
人うとうしく者。私の家よりこ。病人のこ。せ。
りしゐゐづひの族ゐやと存じどうこでめこてゆ。くとつく
されて出らんひへとしこれだ。在墓つ寺へ。ひ在りをうと人田
中へ立つぎて。ひさうをやぐて時をうつ。ず去場百姓ゐ家
ゐこ。こ入て。そのていをうかぐふよ。推量のていよとぐこをくや
ぶきてろつぐりを方よりうけ。ゆ田在墓をうれーあて。ゆふし
てゐうりして。在墓つ寺ひて。ちさへ。いづくいゐあうゐのぞくれ。今
怪の時在。うろんゐりとたづひよれ。ゆ田をこ。をぞうと

こぐをよゐひて。私い獵りのゐのこそゆ。病動ゐとくこ
て。ひ面ゐよちぐうく足をとあゆ。さうくゐうねをゐ面て
ひとゆ。て在こそぐ在墓つ。笠をこひてこくゐまぐうたびて
ゐさ三底ゐり。板こそとゐまこ。やぐてこさびくく絶をけ。
田中のまへゐぞ引ゐろ。ひ時を活ゐみ怖懼ゆ。振指ひ
たーゐこ。自害の激しかうろんひ。振指ひ大罔赤在
ひこり。板仕りて。一天三寺。他い兼ゐとこさこ。板
十九日のゐ夫ゐ。三底をうゐかぐう。竹の筒で貫ゐさけ
れば。こ時三底貝をうゐらげ。口おーやと涙ゐ。それーり
仍るゐちぐうつけ。たゆへつ面て兼ゐ。弟細のゐりむ
こ言ゐ。て。ゐ振指をしこひげう。在墓をこし
ゆこれて。三底ゐれ小神をトこれ。祝賞をゐうたゐこ在ひ

名ハ。寛仁のはじめごろと今ヨつてうたがつて。ホヨ三成
権威よりて大名をゆぶーろよろひ。賢人をさうひ。病
人をあし。若をえそ、ハねうこ。無法さけに地をあげ。邪を
くして用まげれろ。趙高ヨ指十 だいせり。さろこまろて。
関白秀次ゑし 讒言し。又ゑ讒 陳のわろうつ。石田がは
述ヨしのて。いそろう迷惑しろ人おほ。又大閤薨去
のうち。三成ヨきこ服わろうく十餘人。が友たる脇田
じく肥後ゆ。伝器越中ゆ。浅野左京亮。福島左京亮
池田三郎つ。黒田甲斐守。蜂屋刀禰。牧ケ原の三矢を
書ろし。森三毛をろうえとでヨ另命わろうしを
ゑれ無題をもつて。一命つがゆくのが。毒殺せーをう
せられヨ。そ者墨を高都しーゆさ殺ろ

えさ。びび陳殺をろうびのろう。磔刑をとでいろべ
そ後ゆおへ引出され。侍ハあるをひ。三成不運とでよさ
ある。三成しまぐうく病じより。行ーろ風病ちうくそまろ
うく天命ゆりぐで疾死をはれとヤクうひ。禁獄
せられて。よさをまつ。ちうこあるを。極又安おる無獲
元亀蘆別。石田弟。金山の病と武田刑アお病信玄づ
未ゆゆり。初めの名ハ竹若丸。お泉のうち。鉢部ことといひ
て。東福ゆの住僧。黄衣の僧ヨそろろが。十二万石知
行ヨうて是僧し。ぶびび陳殺の強ケう。無宮山ヨ
陳どんせう。敵軍ヨして完戸佐竹のそろへまじろ。は
別紙次郎を為りしよ。いぐろひうんとつてくし。朽木蔵人
をちゆさ。ろうハヨかう。ホ京ヨもて殺るるへをちゆさ。ホ性

院より勢揃しうちし以。毛利家より援用よつけをき
こう。濱屋平右衛門あとゝ以ちゝひ近付しゆへ。又ゝ手紙
ひそゝふ出。七条の戸場より。ふゝ〳〵ちのびてゆくうゝ。ちうう
よ江別先方の侍より系結とゝ浪人。妻ちゝ左衛門ゝ
し。家敷へうゝ〳〵ト〳〵り。氏時ゝ。平井友九郎。去坂ちゝ
家屋を二人ちゝ〳〵し。初とやゝん世ゝの神柏さゝ〳〵くゝ
しゝ〳〵。妻ちゝ以駕籠より。のゝ七二人の者仇撰しゝ。ちゝの
ゝゝ出ゝゝ。の系結あゝとつゝて。ちゝ以ちゝの侍ゝ。
とつゝしゝ〳〵。駕籠ゝゝゝ二人以。今ハのゝ毛ぬちゝとゝのり
柏ゝゝ妻ちゝをゝゝふゝゝ。ちゝ加ひゝりの頬さゝゝ以
ゝいて。ちゝ〳〵病のつゝゝ。ゝ妻人ゝゝゝゝゝ。
態死人ちゝゝゝゝの場ゝゝうちゝゝ。板系結

よへ靡び来りて。黄金五百兩下されける。色い山村五郎
兼つとて。その内一ぬい沼列の義郷とつうへし。紀藤五の
きりあてまうけ。右兩の出附よ。三成安西ひ安人の後言
申て。義郷を改易きしよりて。西中の侍。皆沼人と
しうくうりてきき恨よ術人して。ごろのうちんをこみ
たびをしてを為こ事。ひとへこ出代の出悪りとて。系
結ハ女ふよをうり。沖領の黄金を。き朝よ貴久て。貴
ゐ配分せしとうよくて十月朔日よ。富山安西ひ三
人を車よのせ。室町一条の辻ちに六条河原をうしきす。
此事口方ようれるく。見物の者物雑集して。ひんとの
きさうをあつまとりうものもけり。又日ごろの邪曲をろ
人ハりのとくしきべれとうちくこそらひうさ
ち三人磔威をうくひ。后ハ獄先をとうさる。食ハ山海の珍奇をつくて。何ようくと
かうしよ。ひとうさ孫殺とうんぐくこハ沼ひよ面ぐうとと
事。墨ゐ必裏の。うさせとハいひかうひさんゐうう斧。
板町をとりとうて河原よおかて。くびをうひ。三条西
よせういをゆひ鳥首よこそうされうう。されハ何ものうち
ちうえん一首の狂歌をとうとうとう
治りどの知ハ西ハ西こそひぞりにされをうつりとし

四 西ゐの書紀の箱史り知ざる事

宴よ又。後ゐ中納言秀家和泉守を
家の臭して。後ゐ美作をさりちさぐへ。又十万石を知し
ちり。西家死ちの時ふよハ八歳秀家。幼稚うりとハへ。ち

閑ひぞ〜ゑのぞいさてよとりて。結ぶ中ゆ絡式と結ぶ
中納ゑよ絶のかり。仍よふそくをかく。雪月花とをあそび。
あ〜ゆしてきゑよ。ひさびさ三ゆよ文章して。家系とゆん
絶せられゑへ。先祖よ弟しして。不孝の乱逆といひべし
和を関ぶゑへ。弱るのつくゑの者。雑兵一万ゑゆ
てむゑまし。九月十六日に敗軍して。伊吹ゑ山づ
ゑひよ。法列橋川の岩へをゆゑ時ハ。佐ゑゑのたで二人。
秀家のをゆ引て。山中帰とゆ山里へ九月十ゑゑ書ゑ
よ。やゑくたどりつゑ色ゑ。わをれゑゆをわゆゆゑ家よ
法列いけこゑり。白樫村の住人。矢部ゑ者つ。ひゑゑ。
落人ありやし。家ゑ〜こさびゆく平。秀家ゆんつけし
うたび絵をゆとゆてむゑひゑゑ三人のをゆゑど。敵ハのれね

ゆをゑ。ゆがまへしてまゆよけ。家ゑゆゑ。秀家と
つゑくゑそ。いゑゑま老へたびゑ人ゆゑどとゑつさへしくゑをねど
ゆりてゆづゑゑへ出ゑゑの人ゆゑぞゆんちぶゆんゆへゆてゑ。ゑち
ゑるべゆさんとゆとゑみぐくさこへれば二人の侍よゑゑびて。山
らんの通り落人の事よゑへゆづくとゆゑちるべゑゆゑ。でゆ
ふゑくゑけへをたゆりのゑ中そ行ゑとゆんゆをけこゆひゑゑよ
ゆをゑゆいゑくゆゆゑをゑゑゆ。ゑ義ゆてゑ。ゑゆ行ゆゑを
ゑゑゑ村とゆて。ゑゑハ三里ゆゑ。ゑゆゑゆゆ家の中く
よ。みゑ〜くゑへ山ふゑゑゆゆて。さのゑ人ゆをゑげゑゑね
ばゑだゑゑく絵をゑけゑゑ。ゆゆとゑゆゑゑへ。さゑゑ
ゑゑゑゑゑへゆさんとゑゑゑよゑゑて。ををゑゑゑゑ。をゆ検酒
ゆて。ゆゑるゑ通ハれゑれば。ゑをゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

ふたり。秀家をそい来せ。三里あまりの山をこえてゆきつけで。月と西山とうるぶさめたをうまずぐれでさうの
こ。みたちつゞ家に入。食事といとゝもてつ。みたつ夫婦化
会のく。ぞこいさうりうをかり。三人の名をたゞ今いつしに
及どゝ。ぞうしくうりうりさられば。ま婦やうをと実ゝりを。
かれ大切にせひいる。豆来んれあやまゝり。さいるみた
馬　家のむらげに。洞宗のまうりを。さうぐにまつくいて
秀家をえへうし。名々のびくまらたべ
たちうへうまかりうり。あうゝ者のはきくに四方の新
強せ打ゝたばのやうこ。秀家のみぐいおりまゝすゝ。
うゝぐふこうへれで。みたちあうまこらひ行ゝぞたのびてた
坂へ送ゝぐやゝ。中風ゆへうる。陽治

つまりし。帰中へと秘蔵して。秀家を後輿よのも
で。ま和ゝを家よきゝひ。右ゝがしを川ゝぐせ。懼ゝか
ぐうゝせり。みたちつゞんのうちそせいかれ。ぞうくの名に
て。中風病の事ゆまべ又神不ゆこよひとそ。食ゝす大小乃
見ゝて。後輿のうちゆそ。まうゆへで。笑ゆしいうゝへいわまこさ
うくあやしむこのへゆ。やゝくゝ坂よたどりつこ。縛のうちそのぐ
れゝうんうゝして。怪ぶ事ハうぐうす。ゝくて秀家まごうへ
祝の信。天主ちこうこうれで。そたたりこ素門さを。和ゝまこ坂
ぐれてやうこうへこぐい西こあわひうへで。そい美ゝやうて名。を
ろうゝの主煙ゝぐ。紀美ゝ。ゝこゆり。我勢の浦治ゝ。蓮華
ゝりうこうたゝうゝり。行ゝとゝまゝこゆゝうへ素やゝうゝしゆゝぐ
ぞゝこりゝへこぐいゆゝゝ。紀美ゝ。ゆゝ行ゝひ。その秀ゝつゝといゝへ秀家

卿の出羽ようへまことに命の出親なりしそ。やがてたべたと
げらまて。ちゐぐくねんごろ。つよくてのてさまくようでゆ結
へた。又こそ知りいなと。ちさうよいと西と元ころ。こ時秀家
ひたびの。恩賞。卿じてを卿じて。生く世こ日ちかべこさ
半こわ。こ。おわれ天たのめぐこしわいて。極光とうみ。な
領安姫。ちろこおわそいう。ゆうど来りこへと。ちろしとして
秀家卿。自筆こ。光文とちこてゆそ。ゆ来つよあこ。ゆこど
ちつこちこぐさろこみぐいちこ。黄金三十枚。引出ものこ
て女房のうこ。衣一うこ。結り。ゆ来つこいこ。ちて。紫ゆ
ひ。秘又。侍。芸庫。以義弘ハ。九月十八日。実ぐこうの。金義
殿加して。伝。場ハこゆ。伊次。山のうこ。退ろよ。ひろハ引
久し。生。ゆりま。ゆこ。ゆ。侍。こ。ゆ。ゆ。ゆ

敵方のまん中へ切ぬけんと。五二三こよりけくりうりてそこを
京軍のさきへ。行〳〵あくまめをさりう。中をも敵陣をつ変西
則たゞ一騎俗はようてうらんとちさりうるをもてすも
ゆるよ。お服の陣長。鞭をあるよれつさ。拍子よりうをもうやと。義
ぐるよりぐひまを西則中〳〵安へど。洲〳〵ゆどや。侍の暮西
へ。敵場よりあるかりと。かをを勇んでうけ出られと。西をいう
で指〳〵ようちうう。くるさ西何けっ引べさ西何引を退
変よりうむりを。良ねとうけ指りう。元ねど指りう合戦よ
元武ちよりうち合。金西をそく行の義うひと。大勢るよれ
つて。五拝よりあとへ引りども。西則ぜひよ及どたりうをかー
て引りどを。指を敵よ。うしろへをじとつまにるとあて
ねげかりうし洲ひをふ。このれりう。をたみりうへふりうぶま

ま。ふをとぐまりて命ををてまず我〳〵が陣所の軍勢
八十騎ばりよりはゆきされ。信勢出よりう。江州甲賀よ
りりう。を日の軍をばげ〳〵くをて。兵粮つがえひまもかし。
ことをう西の合戦よ。軍勢つりうくのをかりを。飢渇大りう
ありう西ばし〳〵いろ士卒よ我〳〵ゆりうくへ近郷へ立入て。
食事よあべをよあり。何ゆをれ西をのをりうこまり
て方をへをりまりう行の月拾りく。さゞをゞとはいびの強
勢よ。皆山林へあげりうれ。ありうに人をわりざをばまりて。
穀のたぐぬとてへ。一粒とそしかりうり。せんりうあり。立入
をばひひりうくのべれば。しひりうをりて。をりうばりをりう
ありうとありへいふをそれいめりをのをやまとねしてや。あご
をふりうりざをそていとりを。をををりうしを食物りををよりく

引て来れとそ。百性の赤しの米るとれすせ。つくよさうこころ
てなるよ食し。士卒ゆと喰しろ。板心中よりけへしが
たでそのたのこだ。十方よられてたどりしよ切腹のてう
いゆて。而の老人ウーとり。いまーウ成ウけ分ぐ。伊賀ごくて来
内せよし。きさよくそくりかでよ伊賀のうへ北ようろう。
山而ハ東軍ぐく。藤井伊賀るの領知のよし実られぐぐ
役とうらへ清津兵庫助。今山城下を通りひと。来内と
いそせし。一里ごりるる事。鄉人は又百人弓鉄砲をた
げえ。為人とでくんと。雑而をろんでまちうろ。兵庫助
兵とんて鄉人ぐうてうて通と。五十騎人ようてうり。
右捕れ捕よとつて。生捕二人。首ろの切とりて。ろう
兵人立ゆり。城の大手より首をうけ。いけどり二人ハ郷のうら

よりごりつけ。矢立の筆を取出し。そのく札を書付て
のさくとお通り十七日の早朝よ。重勝よつさの老人よ
ーさいろる筆とうせて。くーろ。三日の夜よ入て。泉州堺
の町よ入江孫左つが宅よ忍ぶ。ちごーがいぐ休息して
やぐて。出私せられよりう。和方坂の町人。田舎屋乃与とくふの
兵庫助の内宅を。屋敷きうくし出。元と同ドく十七日
の夜ぐ坂を出私しうし。ぐ伊賀の沖ゆさ
あくーう。されぐうの元祖右久ぐ社門して誕生。子孫
孫枝繁よ繁栄を。今又ぐ沖ゆそのうちんひとくを私
助ゆてあるらんと。さぐーく元井とちごーく信勝を。和そし
ーうを結ゆよくそおとひくーしぐ。元法黒田如水ハ兵庫
右安兵の婿で。ぜめぐ。ごくろ附の色ぐ。敵の撰兵でゆ中ご

遠江のくにより番船をもつてまゐらしむる所
薩摩の軍船三艘の船、の船よりこれをせめ
ざたりしが、義船のうちをこんつけ、これのもと赤みんと
ふげ、びうかとよつかがんとす。ふろふ赤船をとがめしうば
鴻津の軍船をとゆうさあつて、ゑみとの外へうぶよりて義
船どもハ逃うけてもどでよのりとんとせ一所よ。赤とゆ船
よ及びしつべ類く船あまくうくし合て戦ゆう。爭おつて九
月廿三日の夜、日向の沖よいてゆる時、小西ふり雪海ふして
さうよ。うかとをちうさまへど。ぐ、ハせんとたぐ。ふてしうみを
見れば海上よ。大のあまくうを見へくるを見を敵のぐり失う
鴻ちるあまのいさり火うと。皆人わやしまふ所よ。若庫ハ
見をとうそ、あのかの紙ちるべよ。楫をとれと。ちうよ赤船

せうれをれば。あらし楫どりうあて。の火をめあてよりせ
られば。船ちくうかとよつうさうりうが。敵船の火ちんとうス
ちよ。わとうをちうくはよりうち若庫ハくうれうハ。若宗り
天皇のつうくうく功章をしを時しがうる事の猛揚よ
ちうてぞうぬ大のはくうとハ名づけ給ふとうや。これいたす
ちうど。氏神住吉大明神のかゆ護ちんと。皆人ちる敬を
る所よなを出ちう数万艘の舟をぐりたてむうのるよ舟
つうしうべ。ちうこびいさうよざうめいて。同月廿六日よハ鴻
よ。ちる船ある。氏の功能のなを代のぐみよ人やうつをべ

諸家系図若記巻之五

孫

諸家高名記巻之六

因縁

一 増田右衛門尉清次丸事

附タリ 後鳳凰の巣狼を吹る

若光の末と家伝少する

㊁ 美村右衛門十六歳にて働の事

附 見世物十番者りの巻のこと

大坂修行亮異人のこと

㊂ 朝霧小巻雅楽助へ恋ひ入事

附 牧次右衛門豪勇にて大力を発すること

多賀尾市兵衛泉州堺へ出張のこと

㊀ 増田右衛門剛腕強の事

他の一芸の術をもさがして。満私の奥を失却せんと

ゐやとてよ国をとでめ。梁殺のやうにくく。ゐをかろ

ガ。天下ひろ〳〵く。ゐ代の松風万巣のちりをぞ

ひろ〳〵。されども右衛門の出ゐ秀郷卿とゆせよ。三歳さま

ぐ北山のもとめまり。世をこのぐへ〳〵。そつのでまもゐのぞ

ミをもろせんとそうりしよ。事かゐどーてかろびこゝろ。ちろ

きでゐ西小西。妄ゐるゐ。陽孫といのゝゐをもわゐど門

く秀郷卿。出ゐ〳〵ゐ。ちゐ〳〵ゐ。

一芸をもろ〳〵とそさこへゐ。そもくしさ秀郷とゆせ

い江列流井 伊おゐ右衛門出の息女。容ゐ美麗なゐを。

右衛門ゐてゐめをよゐ。流のれやゐゐへひゐへ。流

度とやて。俗さの位うてい。警警の撃り。流ううざし
きうしよ。みう系 延生がされて。秀郷にしかをしへ。ちうふ
右岡秀吉。逝去のはい。世上落さ氷をふむいちして。方
氏妻位よ及ぐ。先に右岡弓のつよさまに。たがうぬ事のこ
うまい始ひ。さうよ。たんなくトうまへてうくよをつふう
らくふくして。悪淺く。おられ代をうをようとぞふ人
のこおかりうろされ。実東の大師所。うてにとりて
所を極氏をりて敵を挫ぎ落よゆく。四海をさやう
ふて。日本の位大名。蕪恵のいてぐさ古徳を荷ひ。系
ようつへて。うやまう事。第の風よりびくがめし。これが
秀郷よいうをつくおがりて。寄く右岡治アが補塩田
六郎つ尉右宋大義へ。位合されうろ。いうを毛利中納言

輝元卿を大将よさぐめ。毛利おや中納言を左将軍と
領お中納言を右将軍とし。波阜中納言を副将軍と
して。西国中国へ引提ありされば。治アが補が源孫とい
ひぐさ。されを右国を分よ一うの。叛逆をかりうろとう。
さうよりて実東よりも。秀郷の位金よいかされど。
ひさちう治アが補。小西安重が源孫よ。おうされて孫将
しらもようろ。たぐ秀郷へ。何の子細とかく。大坂よさて
をうもうろぐもぐ。極氏大仏殿とかいかり。右岡秀
吉。天正十六年よ。南紀の蕪弥をうつして。ちうと殺生よ
及んで。如紀しうろ。右よ蕪弥元年。七月十二日。いうろ時
酷しや地震して。さしもの仏像を。破裂しうろぐ拍うれ
ちうろうへい秀吉の下知として。たちのく玉蕪弥のかう

ゆるぎ如来をたろぐ京へ帰のぼりて。彼堂の修繕して。安
堵しなる。さて法花堂開帳の。聖仏の所
望をうけ。りのぬく。若者へ〳〵しうつさまろう。うさ
ねて。数百人の病人をわつか。仏を造りセ給へ。大うさま
出来させ給ひ。首を病つけ。其時。法師の夫を乞やう
まいて。仏の胴の中ゆ。ちろの枝木よりへつさ。賞
よ。焼のかりて。風よひろげ。蛍の枝柳一変よ。焼をうて
枝もぜひなきさわりこれ。信者。秀吉公。大慈丈まわ
て。果報ゆく。一天下を自然と。掌り給ふ。といつ仏。
功よりて。仏式忘れ。を信仏の心をれそずの
智ゆ者よ。信仏を敬し。ゆ事を恨ひ。をして武ねと
感をうるし。聚歛のをを。万民をろ〳〵ゆ者

発を拾ひ。やうくとそのあまりゆて名字をうてぶつ
像をこんろうゆいぞうるる。漏のす若仏祇のうけ給
ふ。ぞさやうの。法人病魔の鉢殊ゆ。ひびくのこんろう
ゆ。枕せびと。ひよいそぬいろうろう。枕と大仏殿の仏八廣く
ゆ。地面とをりて。僧よ言のあ家ふ秋ふく。色の出のね
をさまし。して焼地の茅のいと萩へ芝の家ゆよ淋し
く茅名のこ家檜よろう枕しまらくしゆの仏。じうまる
事ぞう。ちろ不実ふ。ちう大地獄現宮法出乃相京市。
四国元代西人をめされ。秀吉あ拾ろびよ西毋の法度へ修ゆ
ろくハ太閤数を切をつんで。建立ゆ。大仏殿法蔵こひ
焼亡といひ天英のゆと。ハひとへよお世の横死をつぶ。南
京をふりしの左地かれい。春長とひ太閤のんざをつぐ

とつひ。さく奉奥。たうべしの義、出冊子しるしとは是也
ていそぎ、仏奉奥の義を。りよかされる。大岡の代より貞享
国中の金銀を。大坂よりれ込。何事ゆゑ出し給ふ事なけ
れば。つゝしむ、万民困窮しるよ。びび実東の下知よ
りてだ仏奉奥ゆりられば。大坂の金銀ちくへきうて
つゆさくらいろさられば。是実東の出めぐ。ぐ。ぐ。ねど
きりる。さるかどよ変化十四ほよ。大仏の事ゆゑ。ゆわりて
魯般ぐ云を消り。成風が斧紙まいして。後ぐく十九年
の云よ。十云の盧舎那佛。三十三級の堂殿。ゆゆ
造ゆうぬ。御ゆ様ぐ御ぐ。ゆして。春雪のうへよりびへ樓
ふく黄泉のそよりる。ふ極万枝瑠璃。大梁小梁
浄瑠璃。ゆして。ゆうへよ修繕ゆる朱門。ぐへよひゆ。

帝宮よりめぐりて。双なき荘厳ゆれば。ますく出仏
のめぐをふくぐ。ゆしゆる。ゆうゆ。ゆうゆ。ゆど梵殿を焼
て。金赤ゆりて色を焼樓よつるぐ。二六のひぐ。さよ
不浄のねりをさまもぐふぐぐ。ぐぐ。ぐぐ。

機嫌わるく。大坂のもこれを又。何とぞやまけさせそ。
大地震の所相果。強府へ系上しられた。此氣色の
外ど。恐れまりてまりこ川をつぐそて。徒死をといつる。禄
ちよ宿しそ下向仕りしし。お多度をやよろ。びぐんを
賞よ年して。中多度安度成敗。右三人徒死をよさこり。
家西のうへ。ぬまぐよさきいうけ給つるさろう。秀頼の出行
流るるそざよろーうず。何のるよ佐宰人ごあつめ。
秘抱を大ちよそのへ。を習の人をへ。ぬで強横の強古
のそよ。ちうさろ。し。惟よ巨細うこれかしぐろうよ。改
大仏度の種の猪よ。豊臣安康の文字を入て。実を潤
仕かさろ。事。さりとそへは不孝子方かり。これよつけて
と。さんぬる実ケ系の合戦し。秀頼の出金とそ。ねど

らうをとりされそれだ。大坂の三人。ひとび種の猪よ。色
て。潤仕かさろこの事。さりとそへは隠。秀頼ねたびし
先ーちりかさうかりプ。又大坂城よ。佐宰人あつまる事を
い西北三ケ国の大名小名。関東強府への交代よ。遠西の
西方をとへ人をりめん為よ。自然と佐宰人あつまる
とそへ。ちりうかりどひ方かめーあつむるよあらぬどく
ひむしちろべく。此抜露たのそちろの義。三人の在中
とぞ。ひ機嫌をりりてやかぐべしとそ。徒死をうろ
れてのちかの出さとかり。とぞ七月よ及んで南年と
ちや西勢の附義よいちりくちり。大坂へあがりて。帝の
義をまづ。動ちよこの仕せを。お多度ケ内殺あつて。ちぐ
くねじまり。大地震ちる片相を猪へ大坂へくちり。京を

おし。は機嫌のうるはしさ。うつくしひなり。これどもうつ作せるこゝ
ゆへ。大坂かた又。淀殿のは供として。八月上旬より。大阪城ゆき母
大御所のつゞき。淀殿内記殿ゆき母。西業尼。淀殿乳後ゆき
ゆき母。二位のつゞき。は三女秀頼。駿府へうつるひ。又実母へと
乗りて。は機嫌のうつくしい。これらは女性の事なり。伺乃
子細をきく。あいうつくしは出陣をよろこびうつくしきなり
なり。板倉勝重の内院申て。市正お後付うは。むつ。秀吉
公と小牧の合戦のこと。は和睦のこと。秀吉の母を。
人質より。幸引渡れの。は姫へつうこされこゝの例ゆまるを。
今秀頼のは母。淀殿を実家より下向まつくゆべのこと
新将軍のは基のは連枝ゆまべいさこゝは物をとゝまで
それ〳〵天下をすゝ。かゝまるべきとの義ようつて。秀吉

はこれを表相てへ中よて。淀殿を出下向のゆ。さんと。出ゆ
まをして駿府をたちよりゝ三女と出いとまを下されて。大
坂へのぼりゝゝ。市正は物ゆ一病気少へ。乃中より陣をとりて
三女ゆ。はをこれゝゝとや

㊂ 義村市之丞十六歳働の事

関東の作せよ大坂背能ゆ。もそでよは合戦ゆ。お抜り
それば。京都よりおのそを来大医塩おどの責実。悪く仕ま
じゝゝむ。板倉殿ゆ作出されそれば。さんゆ法大仏作責
よ。大坂ゆのゝし法士をどゝろ。そこのもゝりゆへ。大坂
へぞゝぞゝ。まはをおの物と逢。やゝゝ作見よゝをあい
まゝ。実家の出下知をぞまゆ。ゆゝゝ。実よ夜叉和泉ゆ殿
ハハゝゝづゝを警固し作ひ。作義ゆゝゝくあゝたゆ作よ。

毛虫方の乳物を。傷口ぢりめんゞゐるとハ人を。第一大坂への気
かゞを。ふせぐん陰陽を。佐久の城の出羽ハ。松平陽佐ち義と又淀
ゟ〻ゝち。大坂への川舟をし住家を。ゆ〻しめ結ぶ。ばは生ゆハ。
淀京左ゟ反川村又左ゟ反く。桐山藩ぐち住家備口の為と。
板倉伊賀守殿の家来。近藤源左ゟ萩北八郎左ゟ。山口修蔵
山上佐吉殿田上右門を京後のつハものとして。ちぐれる雪
士ゟ十余騎。東西よりくゞりてゝゝめゝち。ちられば大坂よ
と京橋ち。三里と切ゟ素にゝ役所をゝ〻住家をゝ
ゝゝ。たゝ人味方へ〻ゝ〻せ多ゟ軍人へゝち〻ゝ人を。陸ゟ行ゝ
なめてゝを通ゝ〻ゝ。ひゝゝゝゝハ本村ち門ち。淀屋四郎助。
右衛人の家来。武者場数の者をゝを変ち〻ゝ。桐と
大義のつゝ。二位のつゝ。食場反。片桐市正反。大坂城

ゝゝゝあゝて。実家の出羽守をゝ上ゝ迎ゝる。ちられを片桐反
をゝ出ゝへゝもゝゝられど。三人への女獨立だゝち。ゝて出極ゝをゝ
ゝ。ゝ〻ち。伊ゝ出ゝ大義のつゝ。毒殺ゝへゝ上ゝ〻ゝよゝ行ぶ
ん出姫公淀屋を。実家よゝ〻ゝ。出ゝ〻ゝ。大御所の出ん。やゝ〻ぶ上ゝ〻ゝ。
い。中ゝ〻ゝ。ゝ〻ゝ。ゝ〻ゝ。出ゝ〻ゝ。ゝ〻ゝ。ゝ〻ゝ。ゝ〻ゝ。ゝ〻ゝ。
ゝゝでゝゝゝゝを事ゝゝ及ぶゝゝ。何ゝゝ出ゝ淀ゝ人ゝ出姫ゝ関係
への出ト向。ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
出義一条出ゝ出ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

此三月ごの義ぞと云うれるうと。いぶかしし。市西大路へ糸
屋の聖日。所井の年寄所代をめしつれ。強宰人の宿
聖仕る捕ひ。ひとりとして。靈社の罰文の書入て。延引又
をうりる。是し何とぞ無異ぞうふうゆくなるをひさうちう系数
云ふ。市西おんのさうたさみ。実家よん式よりるぞと。大
よいうり給ひ。大乱修理ひ。七組の坊くをめして。市西
ちぞよ実家よりさうさ。秀郷をかろがうんともるのあいだい
あるあをのくあいてうつまよしく作ぞいを同およ
ちうるにい。梅ごに出振れ乱よ方よ梅ごまりぬ。ちうはいん
市西れ動西出ゆるうるくそれ石かうるべし。時よ行相行
ふおく。やと振仕るべ。西をみ無家よちわて。寛喜の組をを
隠しうさうし強ちうませめしとるくうよ。何のよ細やれ

強らんと。ちぞよ式義よれさうれ格りし時。さいぜんちう大
乱修理。踏合としてもうりしぶ。をのくの遠事。此組を組
むしこそいへちうしあうぞいて。ちうとう勢仕るよ。今ちぞよ
天下の大事よ及んで。人のふん區くかう。為じて大ねのこだ
ふ大切なるうのして。慶安ちうふトよかられて。士卒を
をうぶく西時大儀さかりしめしうち。月安ををうけて軍
をせんと斗めふ。秀郷をの作せよいてうふうちうわいて。
僧しあつひる法宰人等。自今大ねのはしてをうぶ。
ふ命をかげうつて。中下和よちうぶかまし。ちうれば捕がうさ市西
一人を。云ふうはとこしの利よして。殺をもの士卒のんを蕩う
と事。毛又莫を加うどやさるふうもつて。式義ちうるべしとへ。
さうしてしとひそれで大ねをとめうして関西の人を。乱乱

度の西美乃丸よりそひへとゝまづひ孫へ止よそう。又逢水甲
斐ちゝとそみ出ドやう。市西美教幸江部職仕てへ。出羽の
芋鶴の分限。猿地玉業の多が。出羽の浅水。そ子何よよ
らびゝ。よくよ犯まへ。ねゝ丸きゝそうへ志津嶽の。七ゝ鈴のこと
一人ゆそ武寡天下の人よりられ。ほ勢のつへものそろめてよ
猪ゐ中りゝ。りりドべし。ものゝ大名ゝ味方とそろ〜敵
よあいつゝんゝ。和ゝ武器のゝろさるよ似ゝり。ぜひよ素
よ仕対られトゝるべし。片桐ゞ敵よゝ〜ゝ。ゝ子の出怒ゝやと
ゞドゝんとゝらりゝまげよ寄へゝれゝ。大ゐるとゝでよ出ゝわゝべゝ。
出風情ゝとゝそ。大地殿和又ドゝるゝ。逢水夜の出ゝ庵。ゝゝ
てたのゝりゝくゝそゝへゝ。ゝりゝ片桐ゝるゝへゝ出なゝゝよゝりゝ。の
ゝの生害よゝあゝぶゝの仕業よゝゝらゝくゝさゝゞめゝやゝるゝよ夫城

けりべーちろる時ひ火雑巾のかど。あがつりかー。はよ
世上の強勢ちづめぐこうるべーごく若ものの出う第ーそ。
あるまりーれとまくれいたのくたよ同ーてくるーてゆある
初ーちく。関係一変赤宮ホーて。皆山あを退出あるこを指
源北甲斐を同及ーて。行初鉄へ系上ひる。市山毒士よむち
い。系秀教ーのひる富のーーちりーて。初ーー迷ーーー方へひを
へよ古初秀古ーの。富持を帯り冥かよつくーさ仕合。ぜひよ
及ーー。有ーーーめて。ーる北山へのかり。通世仕るべーーとりされけ
ーだ。毒士ー板へ。余義ーるーー者ーとちひ。さーめて。秀教ー
ー。ーのひ貴をーーて。ーーー

とそこ。畢竟よわ〻ずゝるゝ者ハ同じ事く絶れぬべきうん
ぐゝるゝく勝負と変せよとこそいふるけるまゝ十郎ハ父ごゝと
やちうよぬうん。清なぐすゝ力とゝぐゝ切こんで。弟ゝ亜ゝ者
さゝを切ゝちうゝ。弟ゝ亜ゝとゝられるゝ者ハ行ゝこんでまゝ
郎ゝひぐゝりの小餐をゝうゝさげゝれべ。まゝ十郎ゝよりて。
左力さゝこゝるひゝるゝ。弟ゝ亜利をゝて。つゝるゝまゝ十郎ゝを切ふ
せ。ゝびをゝいて立わゝりゝるゝ。まゝ者ゝつゝを。弟ゝ亜ゝを
引ゝて。ゝを方を今討ゝゝ。まゝ十郎ゝハやゝとゝれゝゝを方ゝ新たゝ今
まゝ十郎ゝ討ゝゝる。ゝゝがんのぬく。ゝびんゝよりゝゝ。まゝ方
ぬゝゝの為ゝ撃ゝゝをゝたゝとけゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。天下
清ひ大軍。中ゝく行ゝゝゝゝゝ

ふかく恥をとどめまどひぬ。くて大坂城攻落ぬ。
の作法代法にて。協同芸報の為よ。大坂の川口一の河。又ハ
居藤より付之。貴賓の系数。外万石余金銀をもて
実礼。協同へ贈こたらせる。扨ハ人々を。結軍人をも
しられよと。大坂ゑとりの協同よりもて。作法あ
くぐされる。まづ信州の協同を高田安房守昌幸の改易。第
門徒幸村いさんめる者よ。天王寺の秋。居協よりそこより富
治るよりみーるる。高田敗軍の後。又ゆとりよる城ゑ
こより。安房守ハ病死しるゆ。はてび信幸村をまきうよ
まねる結ようして。高田ハ大坂へ手をまりる又安房守数
間と同じく高田ゑ軍やぶれてのうちハ。京都より志のひ
いうーたゆ。ゆくゆとて。乱と大坂へ参りよる。ゆゑ木村長門守

引掃部。紀伊。伯耆守也。故義又長。御宿越前。山口左馬助。小
倉治部少。長門。毛利宗也。故義又長。御宿越前。
なく六万金銀とぞ。ここへ入る。ゆゑ。ハ
協ーるるハ。信州の集り勢。だうりゆて。義協せ人事いうぐ
ゆゑを同じ。かかえの兵。高田城へ入らるーこと。
実東の奥沢。志都ーーーとて。山ゑ事だうよりこく来。代
ひとを関東へうつえ。ゆひうる又うるを大隅のあるへを。西条
の振掃をつるされて。西れをかうるーといへ。図ーゆく。振掃
ををくふるりふのうちハ一向軍作宝ゆて。新条作法
人なるこ。ーー出されて。金銀米銭を刀る。拍奥かどゆされる。
大坂 松陽町を作為ーーて。勢宮をくゆ。実東と戦ーん
とゆられ。ゆ来作為る。ゆとゆ。ゆとゆ。芸のゆ作ーー。

義城より関のしろさまへ。ぐんぜいをあつめ
ゝと。おぢる戦よ。全豊の町人たちをれいを。大切の。義城
つゐやさん事。五拾貫かくれんとねづるくだに。雑兵たゝかひて
関をとでまやくふしを戦ひん事。おろかべしゝ。毒をやられた。
大坂これをもらあど。拾陽より結髪どうまゝ、武士をおくえん
て。町人百姓をこゝとらせるゝ。び附板金の家人。紀伊国屋
大坂の恠よりのび入て。軍仲間を一こゝて。家ねつぢはげ
ちりゝ。板大坂か行相をこゝりゝるいたゝらの恠をせめて
さんゝ。家ねよりこゝへゝれた。板金仲ゝでいたゝらの恠。紀伊
ちんゝらゝおろう。世代変村上三郎つぢ丹波よりとんで。常
よ武勇をそげち。百姓をふくゝわるきみ重ゝるゝ。び〳〵百
姓をゝりよかりべゝたゝらの恠ゝか勢をべゝさゝあらを。板金を

勇をくんでゆるしそれば。村上日法さくいん金銀。兼殘を
れ出し、あつめ鉄砲をおうけさせ百余人いだらさの地へさせ
へさる。先を又大坂より少しもりをいだらさの地せりんとて。味
方をさこ勇まきべうつど。中つく家紋ちりのかぶりのつのの
よハ乃ぶまじと。延ふしーさるぞ癪病なる。地より村上三郎右衛
く武勇をうつかさ大坂小を少及びて。ばくんを恐れる
ひとくよ山登れ世とよさる。しー家より又泉州堺の政所ハ。実
東ちり兼清法名ちとへとりせらもとるで大坂ちり大船を
ありてそしを焼付よとべさと。清名ちりをどろさて
行相市広へかりをこそいたよる。されで市広家人多雑尾
市兼ハ富田ちり明。ひ女人ハ元東陽の若ふて。ば清よ妻ふ
てさうでさくれで。能市ーんのしかくちべしとそ市兼ちり

助よ。兵種百八をさて。陽へかる敵よりついしーさる。さ
れ生乃敵をだ大坂より。さくいまーかさゆ屋敷へまちり。ふ
私ーさのりて。堺のはりよさてり。改百の門より入んとされば
ちや兼清法名ちハ。寅を迎て。大坂場。やぐそ入りてさるぐ。
ちりや行相ちりの加勢。あまちふかーくうつてとれと。敵ふ陽の
つハちの。門のひーりてさうて出。中よりつんで切まらる多雑尾
富田ハ。ちひーげかさ仕兵かぐり。是種さよト知をかー。寅を
勢命ちる名のすでと。大場よりさりあハ。切まり切さられ。
太刀の切んーりふを出しー。ちのぐをさぐり。場をとりてぞ
行くへさるされを多勢りよりかりどーして。百人の足種かりく
いむねんやーくれ又ふりまを頼てぜひさかー。多雑尾ハ元
悲。名行をーむ勇士ふのをだ。ふんぞりくれしくと。雑兵前

人。百姓ようくこまりの口がーさよく。家をとらーゆけて。今年宗言っとらーて。町人の家よりーつと入て火をたもちず月に日のあらつさ。ぜハ名ゆて。服ところて先んぐりゆ。又富田ちゝ助い。書ゆあやんひくをくん。ゆのまふやゝ逆うせてり海を知人ゆうりゆり。市ゆいくゝをちゝど。さゝば博のな信をせんと。十月十日筋本の城をうつたちる。おいちゝぐゝ家人よい結尾ゆ。牧ゆちゝ今村ゆ。月ゆ久家ゆ。十河久家ゆ。又家ゆこれゝを宗徒として。陽教の侍三十二騎。殊勝ゆ百人。雑ゆ者人をしぐて。ゆ海よりゆ。ゆをすく先んゆるよ。ちゝく彩雲のわゝぐよ。ゆ細せ。ちゝ坂の霧登ら。海和亮へいそちゝせられば。大牧天のわゝとよちこび。盗人ゝ1今ゆのゝせ。物ゆ人ゆ者村ゆ家ゆ同

くゆ更今ゆ。ゆ三人をちゆゝて。数百人のものどもを。ゆ海へそつゝる。ゆそよ鄙牧村よりつる時。ゆ長ゆ三ゆ。鄙ゆちゝといゆ。ゆ者村ゆ。ゆ中ゆ。細太和田。鹿ゆ。神ゆの百姓をすゝよりー。ゆ桐を討とめんそそぐねゆひゝる。ゆ家ゆ。ゆ桐ゆ。ゆ者よ。ゆ家ゆ。ゆ者ゆ。ゆ者ゆ。ゆ者

なるを大酒をくらひ。ぴしろうち殺さてる。敵の大將よあぐ
みて。牝鹿とひろへ名乗ば。さすがハ武勇の。伊賀の郎人ら。
名紙をば義をもとれぬつよるの。ものもハ。命を塵埃よたく
へ。勇を金石よひそ〳〵して。敵の敵をナもんドよりけやぶ
ッて。巴の宮よ逃生いー。切ふせつるさあ。まるこの敵のだろ。
うちとるさいつくをたゞ。だ場の敵りよあぐみたて。そうへ。味方
百本槍ふられ。伊丹をうしてぞ引ちりぞく。ぱ百い
ふて。市面ガト知て。守るとの〳〵を。大坂をや。怒れるん。寅の百
姓ら又。伊賀をうしあんとぞ。敵。新ふる。それゆへ。伊丹をも
引ちりをる。當惑の色。ふるの色。湯をえんて。寅ぞ。敵
をあいさへて。ぱだらるこの。川へんと。ちられた。大井ガ郎人ホ
村ヘ。百姓をト知て。ぶ〳〵まを入ろ〳〵てせあたらふ。湯

つ。色ーいだるこ。敗。ふ。百化ふ。敗ふとへたがやや大軍あ
ざひさぐ。牧ひちろハ。赤を村ふ。ちろ〳〵引ふんで。ちろをさの
ておさへとぞ。ふ。貢をうんふとる。三ぢ村の左ぢ。ふちふふ。
うしろ〳〵牧ひちろがちの。ふて。ふ。ふちろ。ひちろの。ふを。
ひとりよふちんと。ふ。ふりの。ふて。ぱちがたぎをとりて。ぱて
ねぢあせ。赤ふ村と。同じく。勝のちさよ。ちんとする。ちひま
ふ。ちろ。やぐそれ。ふ。して。ひちろふ。ふをふとりて。ふとれ。
ふ。ちろをさわぐりて。れつく。ふ。ふ。ふて。ふ。ふ。牧ひちろが
ふ。ガのちにぞ。人。ふ。怒れる。ちをさんて。ふちろ。勝のちさち
ふ。ぞ。ふて。ひちろ。ぐ。ぞくのちをさまをつ。いさりる。ふ。ふて。ふ。
ふ。ひるむ。ふ。ふ。ふ

名ゆへこそやりてくとちがけ名ゞつるよりしんでゝ名ゞ
みとたまゝずうちとゝ〳〵えく人市丘へでゝせよゝ。花尾兵右ゑ門
十河久兵。河野四郎兵衛尉三人ハ。討死の右ゑ門村又ゑのゝ
とうちゝんとうかゞへどもゝ。ごうく面性だゝよ軍させて。柔村記
ゆゝうつず。枕もむ稲んやゝ。雷電を印ゞ。所桐幣ハ藤木
の浦へ引入ゝ。茅村と討合て。市丘赤東七郎を討死ゝ。
雑兵。百五十余人うゝれまゝ。市丘へ討死の士卒とゞめ
ゝて書ゑたゝ孝義せゝ。今ハどつゝゝくゝゝや

諸家高名記巻之六 終

諸家高名記巻之七

同録

(一) 太閤子数分桐とゝ黄金廿本

附多 毛利家又ハ藤堂軍用をかゝゝる
篠原又ハ屋つゞ軍私を慎ゝ

㊁ 石川貞政渡戸問答筋よりして廣言する

附 中村大妻宅丸を護る事

新宅の助合の甍等の強てひづる事

㊂ 矢野長富新宅より知て取合の事

平信雄入江右衛門の事

附 石川玄分村を焼たる敵を討す

㊀ 太閤子牧谷洞ヶ黄金の事

相模の大船よハ薩摩の大船の事

つけて。新宅さらの氏神の事

しの淡路の玉城うとべし。元宮西宮への位り。ちうべし

とふ。名ぐ書。紀の支。仕進よりして。又位

淡うこまいて。牧谷艘の表。私て。遠よ光ちう。

大地獄地元を夢て。海と。を。ぐ。の働き。一番ん忘

ど拘ハらぐ。ぬ。ぐ大事なり。仕損じ。ちう陸ハれ。ハ。ぐ

しと。西城こぐぐく。焼捨。成ハうして。埋ちう。ちう

ちよ中洛の百姓。茅村ゞ下知よりして。いぢちう勢

と戦ハ。よ。この利と。ちれば。大地元。よ。ん。ぐくして

軍ぐ。めの勝利ならしと。大早りよいさこと分
しとそや東西勢とそ。あそこ。ものたくもどと。事
となげよそのこりろ。高田屋作幸村。孫兵衛
へ。今実東のはたの。をこを汁めひ。ほよ仁風目年
の事本をのびけ。あく一命をは思よ。ちろ人おかり。さ
きどつく。愚よ。東西小西の勢いまぐかうび
とのがとそへて。義関東勢を勢くいあ。忍大関。四郎
光秀をは。徐福の吉例よまうせ。山陽表へは人数は
おされ。天王山よ二くび。は藤をわけうも。ものとの
私よ。は先手を作付ら。ろべし。又長宗我部ア又信ハ大和ぢ
ち。責入て。宇治橋を切をう。勢多の橋をとうく
づし石アの宿をさうひあて。陳のそり。佐久の勢と次

をとう。京都は焼ちうひまず。義関西の仕業を。さ
しふさざら。日本西の法治。味方へんぞ。あろる。
勿論。を和いづくとと。ん所さざめざろ事とと。ぐく
ちもまうん事。うさぐハ。いあと。程をつて。わげく
ち。西北の人。ゆしさ。さうかと。ア。さぬかうり。
程ろよ大北アよへ。高田屋の人。いふとをよとそ。
ちうう高砂とアハ。日本一の古地あて。西松の名藤
切りおそうくハ。日本西ぐ。ふ年やナ年
よ。芸粮ハ沢山切りたやもく。をめべさとハ。ぐ。ろう
名砂よ。ひとそうれたる。こりうせ作ハ附ハ。大関の事恵
の事。作事くよもも。ろうべし。どうくはお陳の事。ちうべ
ううどと存ろく。板宇治勢多の橋所引て。戦うん

事。源三位頼政。又いまゝ木曾義仲。いづれも軍よ利を
失ひて。大こゝの例。みな宇治橋多ゆて。お戦。揚
げ。ぞ由来いうふとゆうそれだ。高倉宮。葉山藤合戦
の古例をあつて。此度陣のとゝめ。へ。ぞんの明智殊
勝の。軍のぬく。ばゝ。ゆくべ。又源三位頼政木曾義仲。うづせさまで。お敗軍と
されたその不吉よ。ばゝ合戦ハあるべうず。しかして。多例
をとゝまたゝど。今幸村ぐうづせさの指を引て。治定味
方指利をきんとゆへ。とべて。その利へ。さきんづるをかりく
ともと。義ハ。ハい。ぬ。ハ。ぬ。ぬ。ぬ

高名七

乃ち。軍よまけたるよあらじ。永久三年六月。源義綱陸
の孔よ。彩勾の城宅。二位の禅尼の。下知として。西塞を多
義時国の多時房。猛金ちうてのぢる。皮軍うぢ
せさの指代引て。ゑせ弾よ西よ。東玉場の中よ。芝田
吉云。彼く木宮多集中山三郎。安房。常陸。先陣して
川と渉。皮軍敗北と。近代を是利ね軍弓氏上洛の
時。新田義貞横山。うぢせさの指代引て。戦それを
利なくして。比叡山よにげのぢるくの西くたびくの
合戦よ。一度を指利をねるたゆ。今見平西軍
勢ぢをひろんとるよ。指で引て弾ふとと。指方ちう
ちうをて。伏芸をちうのぶさん。こと小京の板金。伊ん
の隠波せ。うをて江利へまのびを入金。実東場の上洛を

整国をとゝ彩りつゝへうりたられべ味方。歌のとりこ
とかんす必定なり。それと実ちべ巴西西の雲。ぢく
まで秀彩云よ。んざしをかぐ。指をて東西へまのん。
たぐひまくよ影城あ。ありて。時芸をまちちくと。兵舌
利によりられで大井と波色とこれを弾しさとさぐ
め云田波薮ちんどゲ上西ハ伝勇ぜば。又ゝをての指宮
く。ものく逆出付りぬ。猛よ大井波色。小情よりひまへさ
きて。ゑ芸北をゝくまへざろぞゝそうゝさ。云田を指
薮し。りゝを秀彩云の出運ハ色をとちひさざめてゝを
討死の芸北をぞしたりろ。そうへ大井ぐちういゝて
て。左国の多東駿。亜弾ひろ。ふ教が烟といろ。黄
金を金ふ一度のふあ。て。竹かゞゝと名づけてかり

ちゝおろしをなりかねて。こゝを作りかをす。又大閤の養子
仕附のれ殺害をも。手負しゝ。所かゞしよつてうへう。
これよりして義協の法宰人。とゝ多ゝあをく動揺
づうをうをむぞう

(二) 和之馬助金の親藩の強をひのづうを事

発よ隙で智勇を奮命を投て忠義亮をり。
実よ石川伊豆守貞改へ。東大閤秀吉の幕下
ふして。数度の合戦よ手がらをあらつて。を恩賞よ依
て先代より高祿をうゝをり。拾餘金ちさ右作をり
しを。今度片桐とゝて入組しゝがゆへよ。あゞく市ゐを。
分よ張りなゝをひよ言上しゝれで。つゝて貞改と。
片桐同およ動揺をうゝをり。強辯せらゞさ風説を

実て。貞改を八例の偽人をつ。たくひすのゐん。恐よ恐あ事
の秀頼へ以深義のをゝ。をゝ。をうゝ人ゆて。なのをうゝ。
を逆せんと。存じをうをうをゝ。いさゝをゝしめされど。実事の
出下知よ。そひうを逆よ事のいひいかさよ。さうべ天下を乱
よ貞改ゞ命を。偽人をよをうをせんと。ゝ別さゐて十月朔
日の暮うをよ出仕をうゝ。勝力をさゝかゞ殿中よわゐり
て。大坂警理後急用意仕。女人をあゝみつけてゝをうを。
系片桐よをうゝ。高槻をうをぶをんをもをうゝ。秀頼の
出車よたゝしゝをゝ。強辯尋せらるべさよ。宮をうとうけ給。
これよりして頭をのべて系上仕りをうをく貞改ゞ背
をゝをして。よ強よをゐへゝられよと。言ゐをよよだをうて。
二をゞらゐをゝをりをうを。伊豆守貞改へ。夢を人を

こへ。そたけ立人寺。腕のをどりひふくわまして。松のうゑ
弥よひろく。股のきくむしたくまして。たのうゑ色うゑ
ゐぬく。鬼槌たちよりれ。脇さうさまよさけうゑ。血脈よ
なりて。墨烟をゑし。いづまをてとゑんどうこ。
その神ちそ弱しく。巳天を絶り換じうありさま雅久
西言ふと及ど。座中の法士今の威物といひう神ての
力京よりそれて。ひそまりうこりてゐうゑ。粧と変ゆか
ゆまくよ廣云して。色ぞ。座中のいと感じひりと
奥のうこむりて一礼して。退おし。それより大坂を立除
泉州堺へぞりとひさうゑ。これより堺内のさうざよ下。亀
をのが。是の潮西をしさざゆざう。それを大坂浦者法室人
へかをつけていよく。舞浦の文交しとゆんく。ねうり弁

でさうざめうゑ。そもく大坂の浦しやいはは本ぞ双の殿宮こ
まづあい濱くうゑ海上ゆれい白波ゑゆざりさうて春
をひうて。源池浩くうして泥水人るの西海を絶し。
小い大河浦をめぐりて。さうまくゆのきい蔵よそこうゑ。西一
方い平地ありといへ。地さざりして。石塔天よりびへて。こ
うこよ又重の殿宮雲をちのざ。又歩よ一樓。十歩よ二間
の金殿。淋くうして。工近のらうをつう。ちのこのうど。
外廊よ塀ゑく欄をゑう。壁をうくうして源をわり。脾
腕をちげくうざら。狭絶石火矢を仕鉄ゑう。実よ又塀の
面。平地ざらの江門お。早稲村の西。稲荷川の東よ寛
竜の地ありそよ又浦又系縄ざりして。出丸とせんと
ねざゆ。又三田左つ佐幸村ゆわざよい。浦よ系ゑ見行賀

守へ実朱のをたまり。ちうれだこえのはうこうびとあんかれ
べ。南方の出丸を。朱一人よはわつけあつて。一戦の時はなか
の出門をひらうまちだ。法士の数を数ぐろこいひ。ことよ間を
こくこう。孫よあ丁さんこの義。乃和すいとともよこさて也
出光のうへうこふ。四方よ塀とうけ。栖樓をあげて。高田一ぐ
のうけこうよて。横目よい伊本七郎重を雄をこうこくらはこ
つ。ちうれば又諸代事就実て。ひ出丸の義。えよ朱おえこそて
ねうひをこいはよ。高田よはあづけかこうこ事。いうのういそれよ
ひやん。又高不肯あて。高田ひごの軍へ乗仕ろまで。こうの
とおがりひやと大こさよ憤りてりそれだ。いうあとひ出丸
へこ方先よこうこてすまこれかこ。これが高田えの伊加へ
守。実朱のをたまて。法士のこうびあんまをたしたこ

とのねがひ。もっとんごろかぶくゆゑ〜ちう祈てこそ方よろ
中堀の惣軍司をゆつくべきこと。ひいきそ。平遠よ仰付られ
れたる。又酒色よ紙ばし。面目者よあまたぶてこそ怪び
る。武門の情り。世よ。あのかくべきこと。る。板橋ちう東中
よあるいて。道新堀のもとく。樣変村ゆと。池をふく堀也。堀
をくめいて。樽をうけ。ちげく夫ごまをうぐちう弦袍をう
らべもを私者沙。樽淡汚る。中村本家ぞ女人よ。水を私
ばを。数百人うをへらも。西ふちりのぐりの若私をふをくを
しとの。ぼ下知くゆ又少よ伯系ぐ測といふ平ぐり。変年人よ川
二筋ぬぐもて。西へ芦鳴くもゆよ。自然の堀わりて。弟害
ふ絞しふおのもで。変ゆとゆ堀をうけ。樽をゆゆくあいる武
者をゆ余人とあをを。歌私のうをぐんとのうをぐをく。堀の戌丈

福島の新町よい。大北整理亮治安。表私として。大安
宅といふ。数ゆ石橋の。胴私を。をうりうりを。かいち私者
沙として。徳地ものぐ者。大北道新。ゆうびよ変島橋中
守。樋は丹後ち。数ゆ踏の。多の者をを引ぐして。をと私多
の寄ゆを。ゆをぐんとをを文後せり。福島の岩よ。みゆ余町よ堀
をうゆへ。樽をあけ。小舎徳たち。ば平よ。こかンでさよさぐゆいく
又丑寅小あうて。京橋のゆ。丁京町のとく。池をさうへ。川中を
柵を治。弦袍のつをうのをあまくを変よをのてまゆ〜せ。鳴北
今福の歌を。ゆをぐべ〜とあいをうふ。板橋にのさぐゆ

城東橋に

㊀ 本村長門守重成　七千人
旗中白る戸振新　中よをぐま

生駒之内ノ介ノ紀　五千人
陶右京亮　三千五百人
浅井周防守長房　三千五百人
三浦新孫右衛門義世　千人
稲木三郎ノ義重　三千人
多田蔵弥四郎　五千人
神保出羽守重昌　百五十人
速水英俊右衛門尉　二百人
并ニ紀州大和辺ヨリ上ル三百騎
作海之内ノ介信俊　在所之儀ハ不存ニ付ハ
△城の出張口　三千人
仙石権兵衛

雑賀孫一の国ヨリ三千人
織田雲雀ヨリ　一万二千人
ヨリ上ル三百騎
波多野右京亮紀　雑賀ヨリ　五千人
雑賀ヨリ　千人
落田隼人　兼相
雑賀ヨリ　千人
岳孝　秋田之内ノ介　雑賀ヨリ白さきりさき　五郎ヨリ　角丸紙
雑賀ヨリ　千人
井上小左衛門　時利　千人
土岐与左衛門　貞孝　七千人
戸田民部ノ介　七千人

明石掃部全登　三千人
湯浅右近正孝　三千人
石川肥後守貞総　三千人
明石丹後守全延　三千人

□
辰巳のうしの出九八
長田忠兵衛作幸村　多勢二百四十人大略信濃の森
外よりの人数五百人ばかりよりそへ
伊木七郎右衛門遠雄　伊丹図書頭
平井七郎右衛保利
小川治部右衛宣勝　山川帯刀賢信

△一
巳の西の刻に
大野治長の陣所　一万人雑の数かずを付

□二
名張民部右衛門統　三千人
建部甲斐守政之　四千人　先七組のごとく
藤堂高虎
藤堂地より紋付のみる所八幡先の丸
一番渡河　竹内源助
大鳴門三郎　作兵衛子代
高木民部少輔信重　雑賀市郎の小田善
長野左兵衛尉　先七組の衆ごとく
赤松伊豆　川合又八
牧野出雲守　高野市三郎
海の北の刻に

一野隆兎亮治郎　一万人
　　雑色白紋弓和矢笠三ツいろ戸ヶ国ノ
　　千五百人
　　五千人　元八ヶ国総ノ為惣人ヶ
　　一万人　七組のうらく
　　ゑ松弥三郎
　　水野内記
　　中尾弥三郎
一△　蜂田圖書　猪喜
　　雑ノ役折入ゑ　ゑ戸ヶ家月撰纐七付ル
　　中村平助
　　鈴木孫重
　　鈴木弥太郎
△　中嶋武弟か懸氏重　　ゑ七組の表乃く

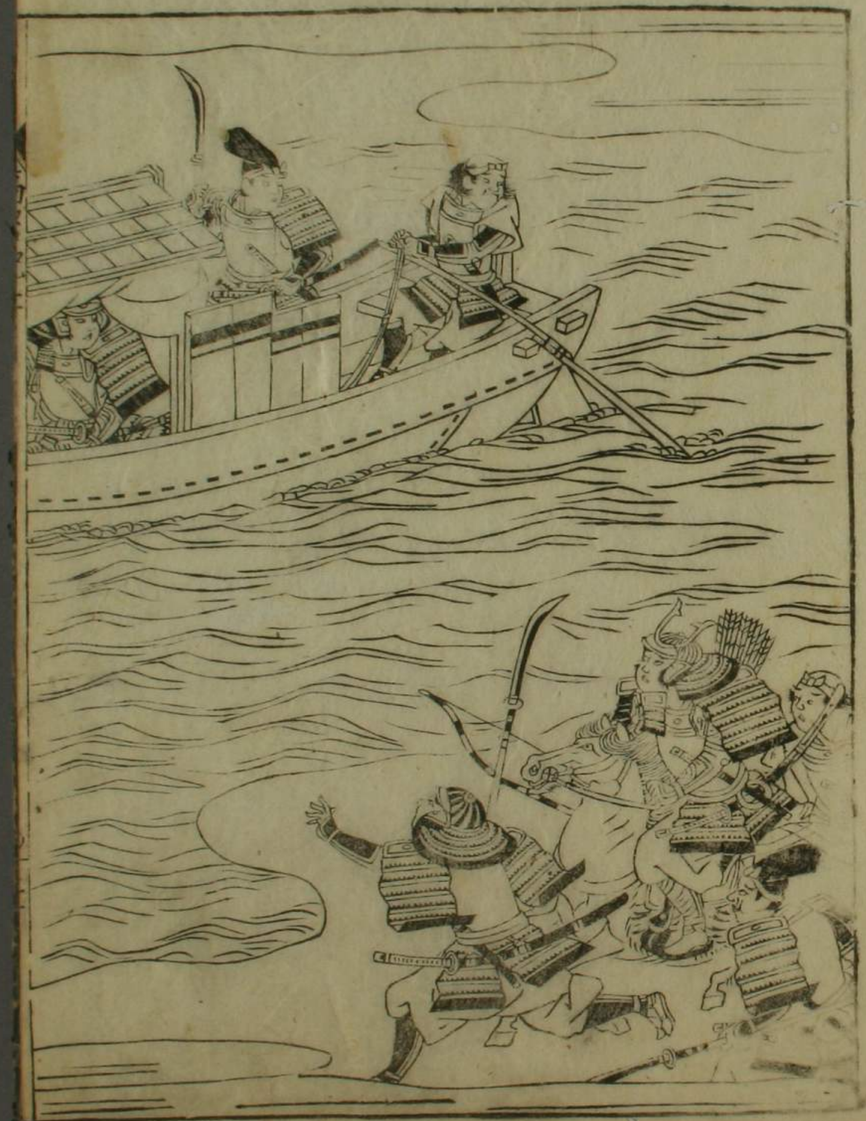
　　雑白　ゑ戸一ヶ代国　与の事ヶハ
　　河村左兵
　　船津九郎ゑ
　　林助十郎
○一　蜂ヶ村伊与ゑ雅楽　　ゑ七組の書乃く
　　雑白紋大文字ゑ戸組の屋国総ノ役ヶ
　　田中徳兵
　　横田源兵
　　器村百ヶ助

ヒ上ゑ口の三ヶの人数ヶ。数郷中二の丸よ。織田ゑ系。統冊
役ゑ。為ゑ役ゑ。ゑ方の方ヶ。ゑの方よハ大殿伝法ゑ
治徳ヶ。伊賀ゑ。ゑ人てゑ。ゑ丸よハ秀松ゑ。
びよ出奴流ゑ。素ゑ。ゑ。ゑ。

代五位の職なり。かく宰人をあへすべくへうり。細川殿故吉
毛利河内守。今木源左衛門。平井右衛門。同じく決定つ。さ
庵徒のかん人。雲霧法師此職を引ハ。和尚と山反良刻。金
のこうりさうさ。十二年をわづらはれる事ハ大酒ちうてこうり
金の鮒蒸。すとよ金のこうりさうさでつけうを。夕日よりくやう
して。ぞうえうう。法ハ川左近親分と。蔦の次めさ。百年
晩風よりびうして。なんりんしうあり。あかさかぐら赤
鈴の。一湯東楼の。ちうさまちあて。庭宅よわるうしうぐハ
ろ。ちうげよ教万鈴。胄の紐をつゝね。甲のかりとくやうして
秋絶をうつけ。火絶をたゞちみ。又ハうちうちう。弦巻つく
らい。捨よ奥あぶつをめり。四天の乱ぞのこ。敵をちうと。まちう
けうり。軍役十二人。偽をうけて。役ちくをそなへて

時くの位をつゞる。秋よ城のうまへ。秋のてい。長子孫あり大敵
をひしぐ。粥をかし。樊噲同勢が勇をあらう。項羽が
山を傍いさわる。秋よ三軍自ゆるとゝ。ばゝたや
もくハをいべうずくぞうへよろう

三　南北乃文三つ東つと矢玉和泉と九谷の事
慈烏吐哺して。悪のおとゝ事をちり。雲風飛翔して。
徒のひりを見とり。梅と織田右府信長の侍子。平佐雄
入を常吉。ばゝ乃ハ大阪天満よ五位ゆりぬ。ちれで秀吉
ちり。出役ちして。赤松内侍。高田隼人。又ハ毋浦屋ちり。
二位のつゞ。右三人毒ちしし。ばゝび秀吉大仏でおがしめ
しうちゆよ。ちうゆよ。さいうる。南北よ出ハ事。ばゝくよ
右府の出仕合よハ。沼名子鈴。あづけ。ぞうさのあゝ。二の



九をはりてあとにたゝるべしとの出れば力り。吉志実のひ。系よ
る猪の隠岐さ〻きをくらべさとの事。それいらかけてびれ集
ひとはなをべ。中く系ゞ下知よ。ちゝ〻ばやまゞ。和ら鷹代
の力。あまくゝ猪いをちり侍性をお徳ゆ。をこいさちらべ〻しとの
義をそ。四猪年人二位のつゞひ。どゝくいの形こ義とうくとくゆ
つゝして。退出仕りゝゝ。吉志いやゞそ。家天満の川ゆ。
京へ出りゆ。四猪隠年人。叔いをゝうされうよゝ。吉ひいゞ。
逃ゝゝとゝをたゝゝや常志いゝ。板倉伊賀守へ四通しゝゝゆ。
京ちをゞりて吉。ゆ十人余綺。吉志のはひゝよる。海の
隠りしゆく。二条の海へそ。ゆ海へ。ゆいゆ形ゝの出れ。さりと
ての筋ゆゝさ。ゆ人系ひ吉志いゝ。信長のはゝ。そ。大国寺
吉ゆあゝべれたゝ。ゝをゝ系よゆをゞ猪ゝべゝ。ゝ系よゆをゞ信

ぶんぶ。内智をろうしこころと。内ふんよりろ。ひ。内智ハ。
よしそ。こ。ろ。ハ。ま。の。敵をろうがもと。おほかりと。諸人よ。
て。内智を教し。こ。ろ。こ。う。ま。て。こ。づ。り。い。つ。と。ま。く。威勢を以海
ま。ふ。ろ。ひ。天下を。ま。ま。ま。ぼ。ろ。ま。ふ。れ。少。ま。の。ま。ま。常。ま。
ハ。常。く。の。ま。と。ま。り。内。れ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。
常。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま

ぐつこと事ありつるを。宰相殿とゝ申りくるが。ひゝとび大坂のたよりたゝかひ。第一にて十くゝ。第一一方をはあづけ下さるべし。
沼方軍方をかゝ十こん。つよく御勝利のうらへ。松あづうあるを中村が唐後のあかぼれ。それ下さるべしゝのねがひ。
彩色をよゝうに先。いそぎたれどの事。乱づうべうゝと。沼方軍功を結まとて。宰人を百人はあづけかれうゝ。そして
と後府ゝり大御方はは上洛とゝこゝれば。彩和軍ゝは。
かゝ馬あて。坂東坂西小陸奥。そゝ和義関西の事を府
のゝんゝへ。をよは仕り。はは先ゝ方へ。松ゝゝんどゝと。はは陣へ
いまゝ。武川源川より後へて東海をつゝゝ京伏見より
あまつて。大津山科。硯湖小栗栖。こゝゝふゝ第。毛羽乃
上下。浪やゝゝ山陵。菖蒲。さゝのゝや標北牧方矢河。

松のを梅津。嵯峨桂。宇和ゝ百ゝより。軍勢入こゝ山城
よゝらて。第より。家ゝの猿を。筆ゝゝ孫ゝよそけ
きゝ。綿綿風よひゝゝゝをうゝを。甲冑のゝかゝものへ。里地よゝち
より後武のひゝりをうゝを。
てゝゝぶゝぬし。京童のはゝゝゝ。大御所の忠信より
ゝゝゝひつゝゝ実東勢。これより弟。ゝゝ身をゝすゝ
ぢゝりの宰人武方何ゝて。ゝけ合たまゝゝ。ゝゝゝゝ
大坂勢。たゝゝゝゝをゝゝて。城をゝゝゝゝゝを稿ゝたゝひと
を。一防いこゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝを。の日
沼ゝゝゝれゝ。軍中の御制法。軍勢多ゝの事。
坊福藉ゝまゝ。又大男ゝの義。背一ゝゝゝゝゝゝ。
田畠何ゝゝゝず。ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

を上つゝ入べうゝず。右の趣きをもつて。京を立この百姓町人。とゝてと。雑兵佐
ど。をゞゝゝ。ゝの。出出陣といふるぬるものこそ。ゝうゝう。く
て。矢部和泉へ。義弟ゝゝ。ゝうゝ。ゝ。弥宰人ごゝ。
し。鄙俗を。ゝ。大和ゝ。出て。郡山。筒井ゝ。ゝ。
出をとゝ。焼付ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝ。
ゝ。むねんやゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝ。
ゝの。代ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
南北をゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝ。
入ゝて。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
神社仏閣の地かれた。大御所ゝゝ。

数堂和泉ゝ。ゝ。ゝ。和州の塁園ゝ。ゝ。ゝ。
尾上ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
和泉。今ハゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
んとゝ。霜月ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

諸家高名記巻之七終